

「降る雪は あはにな降りそ」攷

前田 圓

序

我が国最古の歴史書、『古事記』と『日本書紀』は、前者が元明天皇の勅命で太安万侶が撰録して和銅5年(712)成立、後者は舎人親王撰で養老4年(720)完成と、夫々の成立事情は明確に分かっている。これに反し、記紀に遅れること70~80年、宝亀11年(780)までに編纂された『万葉集』の成立事情は、編輯の目的、発案者、編者の問題などを含めて、平安時代から今日に至るまで数多の研究者による考察を経てきたが、未だに解決を見ていない。万葉集成立研究の跡を辿るのは、私(筆者)の手に余ることなので、差し当たり今回の拙論に必要なものだけを、それも最近の研究に限って、取り上げて整理して置きたい。

久松潜一氏は、『万葉集の研究(一)』(至文堂s44年)で、「万葉集20巻は各巻によって体裁もしくは表現法が相違していて、到底同一人が同時に編んだものとは思われない」として、全20巻をA~Fの六グループに分ける：A：巻一・巻二、B：巻三・巻四・巻六・巻八・巻十七~巻二十、C：巻七・巻十~十四、D：巻九・巻十六、E：巻十五、F：巻五。そして、選者はグループ毎に異なるが、最終的に編集整理した人物に大伴家持の名を挙げている。次に、伊藤博氏が『万葉集の構造と成立』(1974年 塙書房)で斬新且つ説得力ある論を展開し、これを品田悦一氏と多田一臣氏が敷衍している。三氏の論の骨子は次の如くである：『万葉集』の始原は、巻一の前半部第1歌~第53歌で、持統天皇の発意と要望で編集されたので「持統万葉」とも呼ぶべきもので、編集者は柿本人麻呂である。次いで、巻二が元明天皇の意向で編まれ、それに巻一の後半部第54歌~第83歌の31首が追加された。伊藤氏はこれを「元明万葉」と名付け、編者には太安万侶を擬する。雑歌・相聞・挽歌という万葉集での三大部立もこの時期に成立した。更に、天平16年(744)頃、巻三~巻十五が追補され、その後、延暦2年(783)までに、大友家持の私的歌日記歌群巻十七~巻二十が、家持によって増補されて今見る体裁になった。かくして、『万葉集』の各巻は、発案者・編集者ともに区々であり、構成も巻ごとに異なる。現に、巻一の体裁は、「部立」(雑歌)→「題詞」(代々の天皇の宮号)→歌(年代順)と書式が揃っている。巻二もほぼ同様に、「部立」(相聞・挽歌)→「題詞」(天皇の宮号)→歌の順である。巻一の前半部「持統万葉」の編集目的は、持統天皇の天智・天武王朝の正当化・神聖化であった。一方「元明万葉」は、元明天皇が持統天皇の天智・天武王朝顕彰の初志を受け継ぎ、同時に当時ようやく形をとり始めていた「宮廷サロン」のための歌集を編輯して、自ら享受するのとともに、次世代の皇嗣候補、軽皇子(後の文武天皇)や首皇子(聖武天皇)の教養のための文芸をも目指したものであった。

しかしながら、『万葉集』巻一には、冒頭から題詞と歌との齟齬が露呈している。『古事記』、『日本書紀』で顕著だった本文と挿入歌謡との乖離ほどではなくても、巻一のみならず巻二にも、題詞(前書き)と歌の間に少なからぬ不整合が見受けられ、そのため、題詞の信

憑性が問題となる。巻一の巻頭歌は、題詞によれば雄略天皇作とし、春の野摘を詠んだとする。しかし、これは元々不特定多数の人々の間に、野遊び及び妻問いをモチーフにする民謡として発生したものを、雄略天皇（大泊瀬幼武天皇）に仮託したものと考えられる。

雑歌

はつせの あめ し すめらみこと みよ おほはつせわかたけるすめらみこと
泊瀬朝倉宮に天の下知らしめしし天皇の代 大泊瀬稚武天皇

天皇の御製歌

こ 籠もよ み籠持ち 掘串もよ み掘串持ち この岳に 菜摘ます兒 家聞かな 告らさね そらみつ
やまと 大和の国は おしなべて われこそ居れ しきなべて われこそ座せ われにこそは 告らめ 家をも名をも

第二番歌は、題詞によれば舒明天皇の歌である。

たけちのをかものとみや をきながたらしひひろぬかのすめらみこと
高市岡本宮に天の下知らしめしし天皇の代 息長足日広額天皇

天皇、香具山に登りて望国したまふ時の御製歌

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は
煙立ち立つ 海原は 鷗立ち立つ うまし国そ 蜻蛉島 大和の国は

これは、以前何処かで見たより古い歌、『古事記』30番歌謡の倭建命の望郷の歌：「大和は 国のまほろば 畳なづく 青垣 山籠れる 大和しうるはし」、或いは、同じく『古事記』仁徳天皇条の国見の話の想起させる：ここに天皇高き山に登りて、四方の国を見て詔らししく、「國中に煙発たず。国みな貧窮し。かれ今より三年に至るまでに、ことごとく人民の課役を除せ」かくして、この万葉第二番歌の出自も問題になるであろう。都倉義孝氏は、「従来の国見歌を形式・内容ともに遥かに凌駕するこの舒明国見歌は、宮廷詞人による代作であろう」として名目上の作者と実質上の作者の錯綜を指摘している（『万葉集物語』「香具山の望国」都倉義孝 有斐閣 p.38）。

巻二の編集者には、この巻の発案者や歌を享受する受容層（読者階層）の好みに合わせて、「題詞+複数の歌」の形式で、伝承に基づく歌物語を創作しようとする傾向が見受けられる。現に、巻二は、仁徳天皇の皇后だった磐姫の天皇を偲ぶ四首の恋の歌（第85歌～第88歌）で始まっている。そして直ぐ次には、先行の第85番歌に酷似する歌（第90番）を、全く別事件の題詞と一緒に掲げる。巻二の巻頭には、従って、矛盾する二首と連関の薄い伝承に基づく題詞が並列されている。具体的には、第85番歌は、「君が行き 日長くなりぬ 山たづね 迎へか行かむ 待ちにか待たむ」と、家にあつて仁徳の帰りを待ちわびる皇后の「しおらしい」歌となっている。これに反し、「古事記に曰く、輕太子、輕太郎女に好く。故にその太子を伊豫の湯に流す。この時、衣通王、恋慕に堪へずして追ひ往く時の歌に曰く」との題詞を持つ第90歌は、「君が行き 日長くなりぬ 山たづの 迎へを往かむ 待ちには待たじ」と、流刑地まで夫輕太子を追いかけて行く強烈な決意を述べた衣通王（輕太郎女）歌である。万葉集の磐姫像は、古事記での頑強に夫仁徳の浮気に反抗したあの嫉妬の固まりとも言うべき「磐之媛」から、従順な皇后へと改造されている。同じく古事記から搬入された第90番歌での輕太郎女の道ならぬ激しい恋も、万葉集では詠い手は優しい磐姫に、歌の内容も「テニオハ」を修正し、より穏当で望ましい女性的思慕に変形される。律令政治形態下で、官命により、国司や、防人と

して地方に赴任したり、或いは行幸供奉で旅する夫の留守の間、家と子供を守り、夫を慕うのが当時の理想的女性像だったのかも知れない。しかし巻二の編集者の題詞や歌を恣意的に操作する態度には著しいものがある。

巻二から、もう一つ編集者の意図が透いて見える四首の相聞歌を引く。題詞によれば、歌い手は大津皇子、石川郎女そして草壁皇子の三人となっていて、テーマは石川郎女を廻る三角関係である。

大津皇子、石川郎女に贈る御歌一首

あしひきの 山のしづくに 妹待つと われ立ち濡れぬ 山のしづくに (② 107)

石川郎女、和へ奉る歌一首

吾を待つと 君が濡れけむ あしひきの 山のしづくに 成らましものを (② 108)

大津皇子、竊かに石川郎女に婚ふ時、津守連通その事を占へ露はすに、皇子の作りましし御歌一首 未だ詳ならず

大船の 津守の占に 告らむとは まさしに知りて わが二人宿し (② 109)

日並皇子尊 (草壁皇太子)、石川郎女に贈り給ふ御歌一首 郎女、字を大名兒といふ

大名兒を 彼方野辺に 刈る草の 束の間も われ忘れめや (② 110)

ここでの第一首、第二首は、大津皇子の語りかけに、石川郎女が歌い返す和やかな相聞に見える。ところが、第三首は題詞からして、何か禍々しいことが起こったことが窺えるように書かれている。大津皇子と石川郎女は、「竊に婚い」、それが陰陽師の津守連の「占いで露見」する。密かに逢うとは二人の関係が非合法なものだったと言っているのだし、その情事を暴露又は密告したのが、持統天皇の放ったスパイの陰陽師津守連だった。勿論二人の恋を悪意をもって眺めているのは、第 110 番歌で石川郎女を寝とられた草壁皇太子の実母、持統天皇その人であり、また、その意を体してこの題詞を書いた編集者である。大津皇子は天武亡きあとの皇嗣序列で、草壁皇子の最大のライバルであった。その後の進展はご存じの通りで、持統は冷静に時期を待ち、夫天武が死ぬと間髪を入れず、冷酷に大津を抹殺し、後顧の憂いを断った。

前置きがいささか長くなったが、本題に入る。万葉集巻二 203 番に、「降る雪は あはにな降りそ 吉隠の 猪養の岡の 寒からまくに」という一首がある。この度必要があつて、手元にある日本古典文学大系『万葉集』(岩波書店 s 46 年)で、この歌を読み直した。203 番歌には、題詞が付いていて、この歌が、誰によって、誰に対して、どんな事情で詠まれたのかが分かるようになっている。題詞と歌の間には何ら齟齬もなく、簡にして要を得た題詞には間然とするところはない。だが、問題は正にこの点にある。上述したように、我々は、題詞が介在するために、この巻の編集者の意図した通りに、当該の歌 203 番を理解することになる。我々は先ず題詞で作者名を知り、更に題詞に添えられた注で、作者の出自や作歌の状況という予備知識を得てから、この歌を読む。従って、往々にして我々には該当の歌の本来の姿、いわば“剥き出しの姿”が見えないということになる。そして、一度題詞

に誘導されて歌を読んだあとは、何度読み直しても、題詞が惹き起こした先入主から逃れることができない。

以上の理由から、筆者は、問題の 203 番歌が、題詞による着色を受けなければ一体どう見えるかを知るために、一つの試みを行ってみた。日頃万葉集とは縁のない二人の人に試験台になってもらった。この歌が初めての人にはどう映るかの代行実験である。そのため 203 番に良く似た歌を、題詞や左注を除いて、歌だけ 6 首、A～F 順に並べて、筆者の現代語訳を添え、それらが万葉集の三大部立である雑歌、相聞、挽歌の何れに該当すると思うかを尋ねた。その際、以後の論の展開に役立つように、これら類似歌には、地名（又は景物）、「ナ…ソ」という禁止表現、そしてその禁止理由の三つを含むものを意図的に選んだ。アンケート質問表は以下の如くである。この文の読者も、回答を試みられては如何であろうか。

アンケート

下の A～F は、「雑歌」、「相聞」、「挽歌」のどれに属すると思うか。そして判断の主な基準となったのは、一首のどの部分か？

『万葉集』に於ける三つの部立(分類)：

- 「挽歌」 人の死に関係する歌。
- 「相聞」 親子・友人・知人・夫婦・恋人間の心情の遣り取り。
- 「雑歌」 以上の二つに入らない歌（行幸・旅行・公私の行事・宴会等での歌）。

- A 降る雪は あはにな降りそ 吉隠の 猪養の岡の 寒からまくに (② 203)
(訳 降る雪よ、そんなに降らないでくれ。吉隠の猪養の丘が寒いだろうから。)
- B 大口の 真神の原に 降る雪は いたくな降りそ 家もあらなくに (⑧ 1636)
(訳 大口の真神の原に降る雪よ、そんなにひどく降らないでくれ。近くに家もないのだから。)
- C 神名火の 伊波瀬の社の 呼子鳥 いたくな鳴きそ わが恋まさる (⑧ 1419)
(訳 神名火の伊波瀬の森のカッコウ鳥よ、そんなに激しく鳴かないでくれ。私の恋心が一層つのるから。)
- D 沫雪は 今日のはな降りそ 白栲の 袖巻き乾さむ 人もあらなくに (⑩ 2321)
(訳 沫雪よ、今日は降らないでくれ。白栲の袖を枕にして乾かしてくれる人もいないのだから。)
- E 岡の崎 廻みたる道を 人な通ひそ ありつつも 君が来まさむ 避道にせむ (⑪ 2363)
(訳 岡の鼻をぐるっと廻っている道を、人は通らないで欲しい。貴方が引き続いておいでになる時の人目を避ける道にしたいから。)

F おもしろき 野をばな焼きそ 古草に 新草まじり 生ひは生ふるがに (14 3452)

(訳 野守さん、楽しいこの野を焼かないでくれ。このままでも、古草に新草が交じり芽が伸びるでしょうに。)

解答は、ほぼ予想通りであった。分類する際の判断の基になったのは、解答者の、歌と共有する経験のありなし、現況及び関心事であった。解答者の一人は16歳の思春期で、当然のことながら、6首の殆どに恋(相聞)のモチーフを見いだした。意外だったのは、「土地名」、「呼子鳥」、「避道」などが、解答者にユニークな連想を惹き起こしたことであった。アンケートの結果を、女性の「分類」・(判断理由)、男性の「分類」・(判断理由)の順に報告する。判断理由は口頭で聞きとった結果を筆者が簡潔に纏めた。

- | | | |
|---|-------------------------------|--------------------------|
| A | 女性：「挽歌」・(「吉隠の猪養の岡」は墓地) | 男性：「挽歌」・(吉隠の「隠」は死を連想させる) |
| B | 女性：「相聞」・(家は恋する男女の宿り) | 男性：「雑歌」・(「真神の原」は旅先) |
| C | 女性：「相聞」・(吾が恋まさる) | 男性：「挽歌」・(呼子鳥は死んだ子呼んで) |
| D | 女性：「相聞・挽歌」・(袖巻き乾す女はいない、又は死んだ) | 男性：「相聞」・(袖巻くはロマンチックな行為) |
| E | 女性：「相聞」・(避道はランデブーの道) | 男性：「相聞」・(避道は男が女のもとに通う路) |
| F | 女性：「相聞」・(野に遊ぶ男女のイメージ) | 男性：「雑歌」・(野焼きは風物詩) |

尚、203番歌一首は、念のため、別の二人の女性にも判断してもらった。遠く海外に住む娘や、離れて暮らす孫をもつこの女性たちは、「吉隠の猪養の岡」には肉親の住む遠隔地を連想し、歌は肉親を気遣う「相聞」だと解した。

『万葉集』の編者による部立(従って、アンケートの「正解」)は、A挽歌、B雑歌、C雑歌、D雑歌、E相聞、F雑歌である。しかしながら、後述するように、雑歌に分類されているCとDは、相聞とも受け取れるものであり、Aの挽歌を相聞でないとする論拠もまたはっきりしない。類似例をあと一組挙げれば、「かく恋ひむ ものと知りせば 吾妹子に 言問はましを 今し悔しも」(12 3143)を羈旅歌(=雑歌)に、「葛城の 高間の草野 早領て 標刺さましを 今そ悔しき」(7 1337)を相聞に、「わが背子を 何処行かめと さき竹の 背向に寝しく 今し悔しも」(7 1412)を挽歌に、夫々万葉集の編者が分類した基準は、そもそも何であったか。最終句の「今し・(ぞ) 悔しも・(き)」という三首に共通した詠み手の心情は、具体的に一首の中の何処で、或いは他の部分とのどういう関連で、「或る景での相手への思い」=(雑歌)、「相手を恋する心」=(相聞)、そして「死せる相手への哀悼」=(挽歌)と分かれるのか。

ここで今まで伏せていた 203 番歌とその題詞を掲げる。

但馬皇女 薨りましし後、穂積皇子、冬の日雪の落るに、遥かに御墓を見さけまして、悲傷流涕して作りましし御歌一首

降る雪は あはにな降りそ 吉隠の 猪養の岡の 寒からまくに

題詞には、問題の 203 番歌が詠まれた時期、季節、場所、状況が、詳しく書かれている。但馬皇女と穂積皇子の関係は、頭注によれば、「但馬皇女は、天武の皇女。母は鎌足の娘、氷上娘。和銅元年(708)6月25日、三品内親王で没。穂積皇子は、天武の第五皇子。母は蘇我赤兄の娘、大養娘。慶雲二年二品親王で知太政官事、同3年右大臣に準じて季禄を賜い、和銅八年(715)正月一品に叙せられ、同年7月27日没、」とある。しかしこれだけでは、歌の詠まれた背景は今一つ詳らかではないので、補足する。

天武天皇には10人の皇子と、7人の皇女があった。皇子は出生順では高市皇子、草壁皇子、大津皇子と続き、穂積皇子は第八皇子である。頭注の第五皇子とは皇位継承の順位であった。一番年長の高市皇子は、頭注では、「天武の皇子。母は胸形君徳善の娘、尼子娘。壬申の乱に大功をたて、草壁皇子没後、太政大臣となり、持統10年(696)7月10日没、」とする。皇位継承順位は、生母が地方豪族の娘だったせいで第八位であった。そして但馬皇女は高市皇子、穂積皇子とは異母兄妹の関係にあった。

万葉集巻二は、203番歌に先行して、異母兄妹だったこの三人(高市皇子、穂積皇子、但馬皇女)の間にロマンス注⁽¹⁾、乃至スキャンダルがあったことを窺わせる題詞と、但馬皇女の歌(114番～116番)三首を収録している。更に、巻八に二人の歌三首、巻十六に穂積歌一首、全部で八首載せている。注⁽¹⁾ 菊池威雄氏は『恋歌の風景』(新典社 H.13 p.p. 16-17)で、概ね次のように述べる：天武の皇子女であった二人の恋は、宮廷社会に恰好の話題を提供し、虚実入り交じった噂話となり、但馬皇女の恋は但馬皇女悲恋物語とでも称すべき「語り」となって、万葉集巻二編集の八世紀まで伝承の流れに乗ったに違いない... この歌(116番)が果たして皇女自身の作かどうか疑わしくなる... しかし、作歌事情(題詞)と作者名をもつことによって、この歌はかけがえのない一回性を生きている。

上記八首を、土屋文明編『萬葉集年表』(岩波書店1980年)の年次順で並べてみる。各歌には筆者の現代語訳を付した。『日本古典文学大系』とはテキストの異同があるが、『年表』に従った。

持統年次未詳(686年～697年)

1. 但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、穂積皇子を思ふ御作歌一首

秋の田の 穂向の寄れる 片寄りに 君に寄りなな 事痛かりとも (② 114)

(訳 秋の田の稲の穂が一方に寄っているように、私は貴方に寄り添いたい。他人がどんなに言おうとも。)

2. 穂積皇子に勅して近江の志賀の山寺に遣はす時、但馬皇女の作りましし御歌一首

後れ居て 恋ひつつあらずば 追ひ及かむ 道の阿廻に 標結へわが背 (② 115)

(訳 後に残って一人で貴方を恋い慕っていずに、追いかけて行きます。曲がり角に道標を結って置いて下さい。)

3. 但馬皇女、高市皇子の宮に在す時、竊かに穂積皇子に接ひて、事すでに形はれて作りましし御歌一首
人言を 繁み言痛み 己が世に 未だ渡らぬ 朝川渡る (② 116)

(訳 他人の噂が酷く、辛いのです。それで私は未だ渡ったことのない朝の川を渡るのです。)

4. 穂積皇子の御歌二首

今朝の朝明 雁がね聞きつ 春日山 黄葉にけらし わが情痛し (⑧ 1513)

(訳 今朝の明け方、雁の声を聞いた。春日山も紅葉したらしい。私の心も痛む。)

5. 秋萩は 咲くべくあるらし わが屋戸の 浅茅が花の 散りぬる見れば (⑧ 1514)

(訳 秋萩はもう咲いたらしい。わが家の浅茅の花が散るのを見ると。)

6. 但馬皇女の御歌一首 一書に云く、子部王の作なり

ことしげき 里に住まらずは 今朝鳴きし 雁に副ひて 往かましものを (⑧ 1515)

(訳 他人の噂が煩い所に住んでいないで、今朝鳴いた雁と一緒に、行ってしまつたら良かったのに。)

和銅元年(708年)

7. 但馬皇女 薨りましし後、穂積皇子、冬の日雪の落るに、遥かに御墓を見さけまして、悲傷流涕して作りましし御歌一首

降る雪は 安幡にな降りそ 吉隠の 猪養の丘の 關にならまくに (② 203)

(訳 降る雪よ、そんなに降らないでくれ。吉隠の猪養の岡が関になるだろうから。)

年代未詳(宝亀元年・715年穂積皇子没なので、晩年の作とすれば710年前後か)

由緒ある雑歌

8. 穂積皇子の御歌一首

家にありし 櫃に鑢刺し 藏めてし 恋の奴の つかみかかりて (⑩ 3816)

右の歌一首は、穂積親王の、宴飲の日にして、酒 酣なる時に、好みて斯の歌を誦して、以ちてつねの賞と為したまひき。

(訳 家の櫃に入れて、鍵まで掛けておいたのに、恋の奴めが、又抜けて出て来おって、私に掴みかかるわい。)

以上八首の中、卷八の4、5の穂積皇子歌と6の但馬皇女歌の三首は、結論から先に言うと、本人たちの作ではない。卷八の編集者が、生きている間恋が叶わなかった悲劇のヒロインとヒーローに同情して、他人の作を二人に仮託して相聞のように見せかける思い遣りを示したものであろう。そう判断する理由の第一は、卷八の穂積皇子の歌1513番には春日山の黄葉が詠まれていて、これは平城京の邸宅からの景だと推察される。しかし春日山が近くに見える平城京への遷都は和銅三年(710)3月であり、「和銅元年6月25日、但馬内親王没」とする203番の頭注と矛盾する。第二に、卷八の三首には、少なからぬ類歌が存在する。特に卷十の秋の雑歌の項で、黄葉を詠む40首中には、穂積皇子の二首そっくりの歌が交じっている。「九月の時雨の雨に濡れ通り春日の山は色づきにけり」(⑩ 2180)、「雁が音の寒き朝明の露ならし春日の山を黄葉たすものは」(⑩ 2181)、「この頃の 暁露にわが屋前の萩の下葉は色づきにけり」(⑩ 2182)、「わが門の浅茅色づく吉隠の浪柴の野の黄葉散るらし」(⑩ 2190)。但馬皇女作とされている1515番も、「人言はまこと言痛くなりぬとも彼処に障らむわれにあらなくに」(⑩ 2886)、「人も無き国もあらむか吾妹子と携ひ行きて副ひて居らむ」(④ 728)と、これまた類歌が多い。私に

は、卷八のこれらの三首からは、卷二の但馬皇女歌、穂積皇子歌とは、異質的な声調しか響いてこない。そしてその声調には卷八の编者であった大伴家持の好みが反映していると思われる。4～6の三首は、格調から言っても、歌風から言っても、卷二のほぼ本人作に違いない1～3の但馬皇女歌、7の穂積皇子歌に劣るものであり、上に挙げた凡庸な類歌ともども別人の作であると確信する。

念のため近代の歌人が、卷八の三首をどう考えているかを調べてみた。昭和9年から13年にかけてのアララギ同人による万葉集共同研究、『萬葉集研究上・下』（斎藤茂吉編 岩波書店 1940年）がある。今問題にしている但馬、穂積歌に関して、夫々三、四名が、訓詁・考証・類歌比較に基づく評釈・評価を行っていて、現代歌人の藤原時代の万葉歌への批評として興味深い。云いまわしは極めて婉曲であるが、真意は明瞭である。卷八の穂積歌二首を土屋文明氏は、「雁」・「黄葉」、「秋萩」・「茅の花」と題詠的趣があるとする。鹿児島壽藏氏は同二首を卷二の203とは異なる「何処か卷八的な匂いをもっている」（p. 416）と指摘、卷二歌と同一人の作とは考えられないと言っている。吉田政俊氏のみが卷二の挽歌、卷八の雑歌二首とともに穂積皇子らしさの出たものと評価する。「三首とも二句切れで、調べがきびきびして居り、明快なる御性格をさながら表して相当に手馴れた技巧がある…それは記紀歌謡の文学的意図なき表現方法と、人麿の執拗な表現技巧の追及とに対立するものである」（p. 412）とも評している。二句切れ云々は、評言が簡略過ぎて真意は不明だが、一言私見を述べておく。203歌は、「降る雪はあはにな降りそ／ 吉隠の 猪養の岡の 寒からまくに」と確かに二句切れであるが、1513歌「今朝の朝明 雁が音聞きつ／ 春日山 黄葉にけらし 吾が情痛し」と、1514歌「秋萩は 咲きぬべからし／ 吾が宿の 浅茅が花の 散りぬる見れば」は、203番歌がそうであったように、果たして第二句できっぱり切れているのであろうか。寧ろなだらかに流れていて、特に1513歌は、第三句の「春日山」を繋ぎにして続き、第4句で切れいるのではないか。景と心に関連するこの二句切れの問題は、改めて詳述するつもりである。

二

穂積皇子や但馬皇女が生きた天武・持統・文武・元明の諸天皇治世下の七世紀後半から八世紀初頭に懸けての政治形態は、我が国初めての律令制度に基づくものであった。政治運営は、大化の改新以前の、近畿地方の有力豪族による合議制から、天皇を頂点とし皇族・貴族・豪族をもって構成される体系的な太政官制だいじょうかんに移行した。国の重要政務は太政大臣おまつりごとをトップに、左・右大臣、大納言以下的高级官僚が参加する太政官会議で審議されることになった。組織の形態上、必然的に貴族や豪族も参加するこの太政官会議を、皇室側が規制するための職が知太政官事で、これには代々筆頭皇族が当たるのが慣習であった。諸般の事情で短命に終わった知太政官事に任ぜられた歴代皇族は、刑部皇子、穂積皇子、舍人皇子と鈴鹿王の四人だけであった。天武の皇子中最年長で、但馬皇女の夫だった高市皇たけち

子は、持統三年（690年）皇太子草壁皇子没後、太政大臣に任命され持統女帝を補佐し、事実上の皇太子であった。大宝二年（702）持統の死後は、刑部皇子が初代知太政官事に任じられている。穂積皇子は慶雲二年（705）太政大臣に、和銅元年（708）には、知太政官事になっている。このように穂積皇子は、常に政権の中枢にいた。更に、穂積皇子を含めて、天武の10人の皇子達には、当然のことながら皇嗣の問題が付き纏った。皇嗣序列は、1草壁皇子、2大津皇子、3舎人皇子、4長皇子、5穂積皇子、6弓削皇子、7新田部皇子、8高市皇子、9忍部皇子、10磯城皇子の順であった。草壁、大津の二皇子が1, 2位を争い、最年長の高市皇子は、生母が九州の地方豪族胸形（宗像）君の娘だったので皇嗣順では8番目、穂積皇子は5番目であった。

後世のイタリア・ルネッサンス期のマキャベリズムの先蹤ともいうべき冷酷さで皇位を篡奪した天武が、晩年頭を悩ました問題が皇位継承であったのは皮肉なことである。天武八年（679）五月、天皇は鷗野讚良皇后以下、草壁・大津・高市・川島・忍壁・磯城の六皇子を連れて吉野行幸を行う。目的の最たるものは、後継者問題だった。出席者全員で団結と天武皇統の長久を天地神明に誓ったが、その後の経過を見れば、この盟約が如何に虚しかったが分かる。周知の如く、朱鳥元年（686）九月、天武の没後、皇后鷗野讚良が直ちに称制する。皇嗣問題に関する皇后の意志は唯一つ、わが子草壁皇子を次期天皇にすることにあった。冷徹鉄の如き鷗野讚良は、十月には、先ず後継者として草壁の最大のライバルだった大津を、謀反の廉で謀殺する。密告したのは、吉野の誓に参加した天智天皇の第二子川島皇子であった。忍壁皇子と共に持統から疎外されていた川島は、疑心暗鬼からか、それとも確信犯的行動だったのか、莫逆の友、大津を売り渡すことによって、持統体制の中での身の保全を計った。亡き天智、天武にも劣らぬ専制君主でマキアベリアン（権謀術数家）持統は、実子草壁を除く残りの皇子達を、巧妙に差別待遇することによって意の儘に操り、草壁を妨げるいかなる企ても、芽のうちにそれを摘みとることを試み、うまく成功した。皇子達の中で持統に厚遇されたのは、最年長で壬申の乱の功労者高市皇子と、若い穂積皇子の二人。冷遇されたのは、上に述べた川島、忍壁の二皇子であった。川島は大津皇子謀反を密告したにも関わらず、その功を取り立て賞されてはいない。

ところが、持統の予想もしないことが出来た。天武の死から僅か3年後持統三年（689）四月、即位寸前の皇太子草壁皇子が28歳の若さで急逝した。草壁と后阿倍皇女の間生まれた軽皇子がいたが、僅か七歳である。皇后讚良は直ちに自ら政権を握り、軽皇子の成人を待つ策に出た。翌四年一月皇后は即位し持統天皇となった。同年七月高市皇子は太政大臣に任命され、律令体制のトップとして、皇族や右大臣多治比真人嶋以下の豪族出の高級官僚を束ね、持統の律令政治体制を支えることになる。この間、穂積皇子は、律令政治の統轄者としての長兄高市皇子を補佐した。高市皇子が696年太政大臣の現職のまま死亡した後、翌年（697）八月軽皇子が文武天皇として即位しても、穂積は政権の中軸として残り、持統、文武両天皇に一貫して忠誠を尽くした。それもあってか、穂積皇子の昇進は目覚ましく、持統五年（691年）には、他の皇子達に先んじて浄広弑に任ぜられた。（因みに、授位

の最高は草壁・高市の淨広菴、大津が淨広式、忍壁・河嶋が淨広参である)。同年には穂積は、500戸もの増封を受けている。太政大臣の食封が3,000戸、左・右大臣2,000戸、大納言800戸、中納言200戸、参議80戸であったから、如何にこれが厚遇であったかが分かる。その後の穂積の政治体制での重鎮振りは、慶雲元年(704)200戸増封、翌705年には太政大臣に就任、706年には、「右大臣に準じて季録を給ふ」の記録がある。和銅元年(708年)知太政官事になる。これは但馬皇女の逝去の年でもある。和銅3年(710)、大納言大伴安麻呂は、当時15歳の自分の娘を穂積皇子(45歳?)に嫁がせている。後に坂上郎女として、有名な歌を残した女性である。親子ほど年の違う幼妻への穂積の寵愛ぶりは、万葉集巻四528の左注に、「郎女は、佐保大納言卿の娘そ。初め一品穂積皇子に嫁ぎ、寵びを受くることたぐひなし」とされている。

一方、但馬皇女は高市皇子(後皇子尊)²注2:前皇太子草壁皇子(日並皇子尊)の後継者の死後、元皇太子未亡人としての12年間を過ごし、和銅元年(708)6月、推定37歳で生涯を閉じ、吉隠の猪養の墓地に埋葬される。二人の恋の障碍の一つでもあった持統女帝は大室二年(702)崩御しているが、二人の禁断の恋は遂に実を結ぶことはなかった。

但馬皇女からの直向きな恋の告白である巻二の三首は、万葉集中に少なからぬ類歌をもつが、但馬歌はその熱烈な直情性で群を抜いている。以下三組の類歌(★が但馬歌)を並べる:

- ・秋の田の 穂田の刈ばか か寄り合はば そこもか人の 吾を言なさむ (④ 512)
- ・秋の田の 穂向の寄れる 片よりに われは物思ふ つれなきものを (⑩ 2247)
- ★秋の田の 穂向きの寄れる こと寄りに 君に寄りなな 事痛かりとも (② 114)
- ・後れみて 恋つつあらずは 紀伊国の 妹背の山に あらましものを (④ 544)
- ・後れみて 恋ひば苦しも 朝狩の 君が弓にも ならましものを (⑭ 3568)
- ★後れみて 恋ひつつあらずは 追ひ及かむ 道の阿廻に標結へ わが背 (② 115)
- ・人言は 夏野の草の 繁くとも 妹と吾とし 携わり寝ば (⑩ 1983)
- ・人言を 繁み言痛み 逢わざりき 心あるごと な思ひ吾背子 (④ 538)
- ★人言を 繁み言痛み 己が世に 未だ渡らぬ 朝川渡る (② 116)

万葉集巻二の中に「宮廷ロマンス」的モチーフを見だし、その享受者が「宮廷サロン・宮廷貴族的サロン」であったと論じるのは、伊藤博氏の『万葉集相聞の世界』(塙書房s34年)である。氏は、大津皇子、石川郎女、草壁皇子間の相聞である巻二107~110番歌とその題詞は、編者の意図した一連の恋物語で、その成立時期は、「現実の血なまぐさい皇位継承戦とその結末がついて、暫く時間を置き、この悲劇的恋愛事件が回顧され、物語化されたころ、具体的には和銅五年(712)を遡らない」と結論付けている。但馬皇女・穂積皇子の事件も同様に、宮廷ロマンスと読むべきかも知れない。伊藤氏の言うように、但馬歌三首の題詞を繋げば、当時既に伝承化されていた二人の恋物語の縁起と経過が読みとれるからである:「但馬皇女、高市皇子の宮に在す時、穂積皇子を思ふ御作歌一首(114題詞) → 穂積皇子に勅して近江の志賀の山寺に遣

はす時、但馬皇女の作りましし御歌一首 (115 題詞) → 但馬皇女、高市皇子の宮に在す時、竊かに穂積皇子に接ひて、事すでに形はれて作りましし御歌一首 (116 題詞)

大津皇子・石川郎女のロマンスを「竊かに婚ふ」と、邪なものに見做した編者の眼差しは、但馬皇女・穂積皇子の恋愛に対しても変わっていない。即ち、但馬皇女は高市皇子という夫が在りながら若い異母兄に恋をし、その噂のために穂積皇子が勅勘を受け、それでも尚、但馬皇女は密会に出向き、遂に二人の仲はスキャンダルになったと題詞の筆者は物語る。そして、熱烈な愛の告白の但馬歌が並ぶ。しかし、情熱的な但馬皇女からの求愛に対して、生前、穂積皇子からの返歌は無い。

傷心の但馬皇女は晩年病氣勝ちであったらしい。藤原宮の典薬寮跡から皇女が給薬を願った木簡 (大宝 3 年) が出土している。木簡の存在は『あかねさす紫野』(樋口百合子著 世界思想社 2005) で知ったが、正確に読めなかったので、大宰府市市史資料室に教示してもらった。

表 受被給薬 車前子一升 西辛一両 久参四両 右三種

(受け給はる薬、オオバコの種一升、ウスバサイシン約 37.3g、クララ約 150g)

裏 多治麻内親王宮政人正八位下*陽胡甥

(但馬内親王宮 政 人 正八位下陽胡甥) *陽胡は渡来系百濟人の氏名、甥はファースト・ネーム。

ただ、この三角関係で印象が薄い高市皇子の人物像に関して、ここで忘れずに付け加えて置きたいことがある。高市皇子は、恐らく但馬皇女より 15 歳程年上だった筈で、但馬皇女が高市の邸に出入りした自分と同年輩の若い穂積皇子に心を惹かれたのも無理はない。高市皇子は壬申の乱の時既に 19 歳、父大海人を助け、第一線で吉野軍を率いて奮戦、近江軍を撃破した勇士であった。そのせいもあって、高市皇子には、皇子が亡くなった時柿本人麻呂作る「城上の殯宮歌」(② 199-201) に活写されている勇猛果敢な武士のイメージが伴いがちであるが、実際はかなり繊細な心の持主であったと思われる。万葉集は十市皇女薨去に際しての高市皇子の挽歌三首を載せている。十市皇女は天武と額田王の間に生まれ、大友皇子の妃となり葛野王を産む。壬申の乱で夫の大友皇子を父天武に殺され、天武朝廷に引き取られるという数奇な運命を辿った女性である。日本書紀には、天武七年(678)4 月 7 日、天神地祇を祀るための行列が、宮中から出発しようとした時、突然十市皇女が発病、薨去したとある。高市皇子(25 歳?)と十市皇女(28 歳?)とは異母姉弟で、ある説によれば、二人は恋仲にあつて皇女の死は自殺だったとする。

・三諸の 神の神杉 夢にだに 見むとすれども 寝ねぬ夜ぞ多き (② 156)

(三輪山の神杉を見るように、せめて夢にでも貴女を見ようと思うが、悲みで眠れぬ夜が多い。)

・三輪山の 山辺真麻木綿 短木綿 かくのみ故に 長しと思ひき (② 157)

(三輪山の麓の白い麻木綿のように、短いお命であったのに、私はそれを未長く続くと思っていた。)

・山振の 立ち儀ひたる 山清水 酌みに行かめど 道の知らなく (② 158)

(黄山吹の花が咲き匂う山の泉に行きたいが、どう行けばよいのか分からない。黄泉を詠み込んでいる。)

第一首の第 3、4 句「己具耳委自 得見監乍共」は、古来難解とされるもので、未だ定訓が

ない。『古典文学大系』は、テキストに3か所誤りありとして、かなり強引に上記のように、「ユメ・ニ・ダニ ミム・ト・スレ・ドモ」と訓む。第二首の第4句の「故に」は、前段に故十市皇女の短命と、後段での高市皇子の長寿への願いという反対表現があるので、「…だったのに」と逆接的に取るべきという。第3首の「道の知らなく」と「山清水」は、「秋山の黄葉を茂み迷いぬる妹を求めむ山道知らずも」(② 208 人麿挽歌)、「大鳥の羽易の山に」(② 210)、「袞道を引出の山に妹を置きて」(② 212)、とある如く、埋葬の山は、挽歌の常套句である。

三

序の中頃で述べたように、203番歌も含めて、万葉歌には雑歌、相聞、挽歌の何れに分類すべきか迷うものが少なくない。203番の場合も、歌からは、「吉隠の猪養の岡」は地名であると分かるだけで、一首の中でのこの地名の持つ重要性、ひいては「猪養の岡の寒からまくに」の真情が理解できない。アンケートの答えにも、「吉隠の猪養の岡」は、恋人の旅の目的地とし、「寒からまくに」は、大事な肉親を気遣う心情としたものがあつた。しかし、一度題詞を読めばもう紛れは無い。「吉隠の猪養の岡」は愛する人の奥津城であり、「寒からまくに」は、亡き人の上に降り積もる雪の寒さである。だが、歌に題詞がないか、或いは、あっても簡単すぎる場合には、歌の分別の困難性が解決するわけではない。例えばBには、万葉集本文の題詞は「舎人娘の雪の歌一首」とあるのみ、Cも、「鏡王女の歌一首」と簡単すぎて、これでは題詞が無いのも同然で、歌の分類、従って歌の理解そして分類の基準は、依然として不明確なのである。結局、歌そのものから判断するより他に方法はないのかも知れない。

具体的に論を進めよう。A～Fには、地名(景)、「ナ…ソ」の禁止表現、そして禁止の理由の3つの要素が含まれている。それでは、先ず「吉隠の猪養の岡」(A)、「大口の真神の原」(B)、「神奈備の伊波瀬の杜」(C)と言った地名のもつ呪禁性・瑞祥性が、一首を挽歌、相聞、雑歌に分ける時に働くのか。それとも、「あはにな降りそ…寒からまくに」、「いたくな降りそ…家もあらなくに」、「いたく鳴きそ…吾が恋益る」に於ける禁止命令と、禁止目的の説明部分が主原因なのか。それとも、3要素をも包含する一首全体のひとつ、曰く言い難い綜合力が作動しているのか。

更に、挽歌、A「降る雪は あはにな降りそ 吉隠の 猪養の岡の 寒からまくに」と殆ど同じ構造をもち、明らかに相聞である A「^{ほととぎす} 霍公鳥 ^い いたくな鳴きそ ^い 独りみて ^い 寝の寝らえぬに 聞けば苦しも」(坂上郎女 ⑧ 1484)を、この巻の編集者が雑歌に分類する理由は何か。同様に、飛鳥の真神が原の雪景色を詠んだB「大口の真神の原に降る雪はいたくな降りそ家もあらなくに」が雑歌であるのは納得できるとして、これと瓜二つの歌、^{たとえ} 仮令それには「近江国より上がり来る時、刑部垂麿の作る歌」との題詞があるとしても、B「^け 馬ないたく ^け 打ちてな行きそ ^け 日並べて ^{なら} 見ても吾行く ^{おさかべのたりまる} 志賀にあらなくに」(刑部垂麿 ③263: 訳 馬をそんなに鞭打って、慌ただしく

通りすぎないでくれ。私は何日もかけて、この志賀の景色を楽しめる訳ではないのだから)を、^{かだあづままる}荷田春満流に、^{ひとまる}柿本人麿と別れ独り志賀に留まる^{のたりまる}垂麿の“相聞”の歌と解する『萬葉童蒙抄』(荷田春満全集四 六合書院 s 19 年 p p. 220-221) のは^{いかが}如何なものか。春満では、歌意は「(人麿よ、)馬をそんなに急がせて通り過ぎないでくれ。私(垂麿)は残るが、貴方(人麿)は今日が志賀の見納めなのだから」となる。春満の^{きよくべん}曲弁は、題詞を「(人麿)近江の国より上り来る時、(垂麿)の贈りたる歌」と、()部を補って拡大解釈し、この題詞を歌に^{けんきょうふかい}牽強付会したことにあった。

先ず、「土地名」から始める。A、B、Cでの「吉隠の猪養の岡」、「大口の真神の原」、「神奈火の伊波瀬の社」は、当時の万葉の人々には特別なイメージを喚起する固有名であった。

A「吉隠」の「隠」は、先のアンケートの解答者にも、死、或いは墓という暗いイメージを惹き起こした。万葉人にとっても、「吉隠」の「隠」は、何は^{なばり}扱置き、「^{こもりく}隠国の泊瀬の山や川」を連想させたはずである。記紀歌謡に頻出した「隠国の泊瀬」というこの特別の土地名は、万葉集でも至る所に、神聖な儀式、行事、祭祀、葬礼の場として、一種畏敬の念を込めて詠み込まれている。言うまでもなく、「^{こもりく}隠国」とは、山に囲まれた狭く、暗く、ひっそりとした辺鄙な場所の意味で、枕言葉となって「泊瀬」にかかる。泊瀬は奈良県桜井市の東方、現在の長谷寺あたりの古い地名で、昔、初瀬川を遡上した船の^{さいはて}最果の泊地であったので、泊瀬と称したとの説がある。「吉隠」という地名に異常なまでの拘りを見せるのが、再び荷田春満である。彼は穂積皇子の問題の 203 番歌の解釈で、「吉隠」を「^よ吉く^{こもり}隠る」の意で「^{いのしし}猪」の序詞とする古訓(昔の読み)を紹介した上で、「吉隠」は「^ふ古名張」とも書く^{テキスト}本があるので、「^よフナバリ」と訓むべきものかと迷い、最終的に、巻八 1561 坂上郎女の雑歌、「^よ吉名張の^よ猪養の山に^{つま}伏す鹿の^{とも}婦呼ぶ声を^と聞くが^と羨しさ」(訳 吉名張りの猪養の山に住む鹿が、雌鹿を呼ぶ声を聞くのは羨ましい)を参照して、「ヨナバリ」と訓むことに落ち着いている。坂上郎女歌は、題詞には「^と跡見田庄で作る」とあるので、今の桜井市の外山付近にあった大伴氏のこの所領からは、吉隠の猪養の山は遠望できたはずで、203 番歌で、穂積皇子の「遥かに御墓を見さけました」猪養の岡と同じく实景を詠んだものと確認できる。吉隠遠望と言え、土屋文明氏に、昭和 17 年 3 月但馬皇女の墓を訪ねた紀行文がある(『万葉紀行』改造社 s 18 年)。氏は、近鉄大阪線の^{はいばら}榛原駅で降り、初瀬川沿いに西に引き返して、延喜諸陵式にある吉隠陵(被葬者、志貴皇子妃^{つるばみひめ}椽姫)に参拝した。雪の猪養の丘は特定できなかったものの、椽姫陵の近くに折り重なる丘の一つが但馬皇女の墓であろうと推測する。そこからは遥かに^{いにしえ}古の藤原京を囲んだ大和三山が見えたという。氏は紀行文を、藤原京址からの吉隠遠望の写真二葉を添えて、「御作歌の端作に“冬日遥望”(冬の日遥かに見さけまして)と記されてあるのが^{せんこ}千古動かせない文字のように思はれる」と、結んでいる。

Bの「真神の原」は、飛鳥寺の南に広がる野原で、『風土記』逸文「大和国」は云う：「むかし明日香の地に老いた狼があつて、多くの人を食った。土地の人は恐れて大口の神と言った。その住んだ処を名づけて大口真神の原という」。口の大きく裂けた恐ろしい狼の記憶は、雨の夜の独り歩きとか、吹雪舞うこの野原の旅に発現する。「^{みもろ}三諸の^{かむなび}神名火山ゆ^{ぐも}との曇り^き雨は降り来ぬ^{あまぎ}雨霧らひ^{しの}風さへ吹きぬ^{いた}大口の^し真神の原ゆ^{いた}偲ひつつ^{いた}帰りにし人^{いた}家に到りきや」(⑬ 3268 訳 三

諸の神名火山からすっきり曇って来て、雨が霧のように降ってきた。風さえ吹いてきた。真神の原を通過して、私のことを思いながら帰って行ったあの人は、もう家に帰り着いたかしら。) と、雨の真神の原をひとり帰って行った恋人を思う女性の歌には、狼に由来する枕言葉「大口の」が被せられる。Bの舎人娘子の1636歌「大口の真神が原に降る雪は いたくな降りそ 家もあらなくに」も、降りしきる雪の中で、行き悩んでいる若い女性の心細さがよく出ている。

Cでは、元来祝詞での尊称「カム」+ 神事を表す「ナホビ」であった聖なる土地「カンナビ」(吉本隆明氏『初期歌謡論』筑摩書房2010 p18)は、鏡王女の「神奈火の伊波瀬の社の呼子鳥いたくな鳴きそわが恋まさる」では、単に伊波瀬の冠詞でしかない。その伊波瀬も斑鳩の竜田神社か飛鳥村の神社の森の何れかを指すのみで、ここCでの土地名は、A、B両歌が持っていた神呪性を失って、普通名詞への脱化が始まったことを示している。また呼子鳥も、ここでは聖なる鳥ではなく、カッコウ・ホトトギスの如く、まるで人を呼ぶように鳴く鳥の総称である。C歌と同じく呼子鳥(霍公鳥)を詠む大伴坂上郎女の二首、「何しかも ここだく恋ふる 霍公鳥 鳴く声聞けば 恋こそまさる」(⑧ 1475)、「霍公鳥 いたくな鳴きそ 独りゐて 寝の寝らえぬに 聞けば苦しむ」(⑧ 1484)も、呪性を失い一般的な呼子鳥になるにつれて、殆ど「正述心緒」の純抒情歌に移行しつつあるのが見てとれるが、そのため、反って下線部のような重複とも思われる心情の過剰表現に陥っている。鏡王女歌で、土地名を持つ呪性が目立つことなく一首に溶け込み、「わが恋まさる」と、思いを独詠的に、おおらかさに結ぶ歌の格には及ばない。この点についても改めて論じる。

D, E, Fは、歌が土地のもつ呪性から完全に脱却して、より一般的な景(風景)に移ってしまった時代の作である。まずD★の景「沫雪」は、数々の類歌に現われている。

1) わが袖に 降りつる雪も 流れゆきて 妹が手本に い行き触れぬか (⑩ 2320)

2) D★ 沫雪は 今日のはな降りそ 白栲の 袖巻き乾さむ 人もあらなくに (⑩ 2321)

3) わが背子を 今か今かと 出してみれば 沫雪降り 庭もほどろに (⑩ 2323)

4) 沫雪は 千重に降り敷け 恋しけく 日長きわれは 見つつ偲はむ (⑩ 2334)

5) 沫雪の 消ぬべきものを 今までに ながらへぬるは 妹に逢はむとそ (⑧ 1662)

巻十は、全巻を春夏秋冬の雑歌と相聞に分類・編集しているが、1) 2) 3) は冬の雑歌、4) だけが冬の相聞。巻八の5)は、大伴田村大娘が妹の坂上大娘へ詠み送った「同性」間の相聞である。万葉後期の物を詠む歌、題詠歌の先駆けが此処には見える。A, B, Cよりも時代的に新しく、表現形式の類型化と同時に、盛り込まれた心情の微妙な分化、個性化への萌芽が見てとれるともいえる。3)は、巻十の編集者の注目の的が、偶々庭に降りしく「沫雪」であったが故に、恋人の到着を「今か今か」と待ち焦がれる恋心の方は軽視または希釈され、雑歌として納まった。逆に現実の切迫した恋心とは程遠い抽象的な恋歌4)「沫雪は千重に降り敷け」では、同じ編集者の意識が、沫雪に「恋」の常套的比喻を発見したので、(訳「消えやすい沫雪よ、千重に降り積もれ。恋する私は何日も、それを見て貴女を偲ぶだろ」)と、相聞に組み入れられた。

E 2363の旋頭歌、「岡の崎 廻みたる道を 人な通ひそ ありつつも 君が来まさむ 避道にせむ」

での「岡の崎の小道」は、もはや伝承・故事を纏う故ある道ではなく、ここでは恋する詠み手が人通りの少ないことを望む、名もないただの小道である。同じ傾向は大伴家持編集による防人歌にも見出せる。巻二十の 4408 番の防人の別れを悲しむ情を述べる長歌の「... 大君の命 畏み 玉梓の道に出て立ち 丘の岬 い廻むるごとに 萬度 願みしつ つ 遙遙に 別れし 来れば... 海原の 畏き道を 島伝ひ い漕ぎ渡りて あり廻り わが来るまでに...」の対句的表現と同時に、岡の道や島伝いの道が、昔の旅人が節目節目で、幣を奉じて土地を領はく神を念じた習慣も、「住吉の 吾が須売神に 幣奉り 祈り申して...」と歌い込まれてはいるが、土地神のもっていた強力な靈力は、覆うべくもなく失われている。長歌に付随する二首の防人歌 4410 番「み空行く 雲も使と 人はいへど 家裏遣らむ たづき知らずも」(訳 空をゆく雲も使いだと言うが、家に土産をこつづける方法を知らない。)、4412 番「島蔭に わが船泊てて 告げやらむ 使を無みや 恋ひつつ行かむ」(訳 島蔭に船を停泊させて、家へ使を遣らうと思うが、その術がない。私はこのまま恋しながら航海を続けるだろう)なども、東国人の個性の表現と言うよりは、都に住む人々との共通発想、類似表現が目立ち、都会的のセンスを持った選者・編集者による斧正(手直し)を疑う説を生む原因になっている。

共通発想は、民謡色の強い F の「おもしろき 野をばな焼きそ 古草に 新草まじり 生ひは生ふるがに」(⑭ 3452) で一層顕著に発現する。この歌のもつ「野に籠もる男女」と「野焼き」が合成されたモチーフは、「共同幻想」と言い慣わされている万葉人の共通理解であった。その始原は、前にも引いた記紀歌謡の中の、長い前置きを持つ倭建命の東国征伐の件、弟橘比売入水の時の一首、「さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中にたちて 問はし君はも」(記歌謡 24)に求めうる。そしてこの伝承歌は短歌に近い単詩型を経て、民謡、旋頭歌となつては姿を現し、究極的に万葉集の短歌に流れこむ。この間、野焼きのモチーフは生き延びて、万葉以降も繰り返し採用された。『古今集』春歌 17 番歌は、万葉の「おもしろき野をばな焼きそ」歌での野焼きのモチーフはそのまま、元歌を換骨奪胎して「春日野は 今日のはな焼きそ 若草の つまもこもれり 我もこもれり」(読人知らず)とする。『伊勢物語』十二段は、古今集の第一句「春日野は」を、「武蔵野は」と替えただけで、残りは古今集と全く同じだが、古今集では男性であった詠み手は、女性に変わっている。

旋頭歌の発生から変遷への歴史は、例えば久松潜一氏が、「古代詩歌の諸形態の成立」(『万葉集の研究(一)』示文堂 s 44 pp355-397)、或いは高野正美氏が「旋頭歌の成立と展開」(『万葉と歌謡』上代文学会編 16 p. 119 - 140) で論じている。二人の詠み手の片歌による掛け合い、倭建命・火焼翁の唱和:「新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる」・「日日並べて 夜には九夜 日には十日を」(古事記歌謡 25・26)、あるいは伊須気余理媛妻問での神武天皇・大久米の命の問答:「大和の 高佐士野を 七行く 嬢子ども 誰をし枕かむ」・「かつがつも 最前立てる 兄をし枕かむ」(古事記歌謡 15・16 番) で始まり、同じ懸け合い(唱和)ながら、歌垣での男性による言いかけと、女性の云い返しの形をとる仁徳天皇・八田若郎女の記 64・65 歌、「八田の 一本菅は 子持たず 立ちか荒れなむ あたらず原 言をこそ 菅原と言はめ あたらず清し女」・「八田の 一本菅は 独り居りとも 大君し 良しと聞こさば 独り居りとも」、での過渡期の形式変化(古橋寛氏は、『古代歌謡全注釈・古事記編』

解説 p 397 で、この形式を「転換形式」と呼ぶ)を経て、「天飛む 軽嬢子 しただにも 寄り寝て通れ 軽嬢子ども」(記 84) での軽太子・軽大郎女の恋歌で、詠み手が一人に統一される。しかし、未だ脚韻反復、「水門の葦の末葉を 誰が手折りし わが背子が 振る手を見むと われそ手折りし」(⑦ 1288) や、同一表現を鏡に映したように逆反復する工夫の段階、「山城の 久世の若子が 欲しといふわれ あふさわに われを欲しといふ 山城の久世」(⑩ 2362) から、最終的には、万葉集での数首の相伴坂上郎女、山上億良、相伴家持の旋頭歌と、それらに先行する人麿集での 60 余首の旋頭歌に引き継がれる：

- ・佐保河の 岸のつかさの 柴な刈りそね 在りつつも 春し来らば 立ち隠るがね (相伴坂上郎女 ④ 529)
- ・天にある 姫菅原の 草な刈りそね 蝮の腸 か黒き髪に 芥し着くも (⑦ 1277)
- ・山城の 久世の社の 草な手折りそ わが時と 立ち栄ゆとも 草な手折りそ (⑦ 1286)
- ・この岡に 草刈る小子 然な刈りそね 在りつつも 君が来まさば 御馬草にせむ (⑦ 1291)

529 の「佐保河の岸」、1286 の「山城の久世の社」では、土地の名は、もはや霊力・呪力を完全に喪失して特定のイメージを喚起する能力はない。1291 の「この岡」も同様に単なる普通名詞化している。尚、坂上郎女歌を除いた残り三首の旋頭歌は、人麿歌集に出る。ここに新たな問題が出ている。即ち、旋頭歌の 5 7 7 5 7 7 に於ける第 4 句の一種不可解で且つ不思議な働きである。1277 番歌「天にある 姫菅原の 草な刈りそね 蝮の腸 か黒き髪に 芥し着くも」での「蝮の腸」は「か黒き」の枕言葉らしいが、天平 8 年 (736) 6 月の遭難した遣新羅使の苦難を詠む羈旅歌、「鴨じもの 浮寝をすれば 蝮の腸 か黒き髪に 露そ置きにけり」(⑮ 3649 訳：私も船の上で鴨たちのように浮寝をして、こんなに難儀をしたので、黒髪に露が降りてしまった＝白髪になった)、山上億良の移ろう世の中を哀しむ長歌、「… 蝮の腸 か黒き髪に 何時の間か 霜の降りけむ…」(⑤ 804) での明確な比喻や、逆に若い女性のあでやかな髪を称えた「… 蝮の腸 か黒き髪に 真木綿似ち あざさ結び垂れ…」(⑩ 3295 訳 「… 蝮の腸のようにまっ黒い髪に、真木綿で作ったアザサを髪飾りにして垂らし…」)、「… にほひ寄る 子らが同年輩には 蝮の腸か黒し髪を ま櫛もち ここにかき垂り…」(⑩ 3791) 等と異なる。前二首では、黒髪と白露・白髪を対比させ、苦難と心労を嘆き、後の二首では漆黒の髪を青春のシンボルとして提示しているのに、姫菅原の「草刈り」で始まった 1277 では、続く「蝮の腸 か黒き髪に 芥し着くも」の歌われた状況が明確なイメージで立ち上がってこない不思議な歌で、下三句自体も何となく座りの悪い一首になっている。座りが悪いというのは、万葉人には理解できた「蝮の腸」と「か黒き髪」の枕・被枕関連が、早くも奈良末期には分からなくなって、今日に至っているからである。更に「芥し着くも」の「芥」が何を指しているのか、芥が黒髪に着くのが何故望ましくないのかが、不明だからである。この点に関しては、折口信夫氏が啓発的な意見を述べている：「この歌(1227)は、叙事詩から断篇化した歌らしい。軽太郎女を憐んだ歌だろうと言う人もある程だ。処が、この旋頭歌は、呪文に使われたものと見る方がよさそうだ。すると“おもしろき”も、野焼きの火に 過ちなき様になど言う原義を没した用途を持っていたのかも知れぬ」(『古典詩

歌論集』p. 206)。続けて言うなら、529、1291の第4句「在りつつも」、そして1286の第4句「わが時と」も、一首の中では究極的には不要のもので、単に前段と後段を繋ぐ役しか果たしていないように思える。1291番歌も「この岡に 草刈る小子 然な刈りそね (ありつつも) 君が来まさむ 御馬草にせむ」と、(ありつつも)を省いて短歌形にしても意味は通じるのである。

Fの巻十四3452番の「東歌」は、「草刈り」の旋頭歌と類似発想の「野焼き」をテーマにしながらも、57577の短歌形式をとっている。この短歌に就いて、綿密な考証に立ってユニークな論を展開しているのは再び、折口信夫氏である(「古代民謡の研究——その外輪に沿って」、『古典詩歌論集』岩波書店 2012年 pp. 194-207)。氏は先ず、3452歌「おもしろき野をば 勿焼きそ。旧草に 新草まじり 生ひば生ふるかに*」(*通説は「かに」である)は、平易な民謡に見えるが、正確にどの点が民謡的なのか、そして一首をどう理解すべきか迷う歌であるとした上で、三つの問題を提起している。

第一の問題点は、最終句「生ひば生ふるかに」で、ここは単に「生ふるかに」と言えば済むのを、態々「生ひば生ふるかに」と言っていて、これは現代の言語情調では理解しかねる古い表現である。聖武天皇の酒人女王(穂積皇子の孫娘)への相聞歌、「道にあひて 咲まししからに 降る雪の 消なば消ぬかに 恋ふとふ吾妹」(④ 624)での「消る」の重複と同じ表現法であるとする。

第二点は、最終句が終助詞「かに」で終わっているために、一首の情調が終結せず、「勿焼きそ」に「跳ね戻る」。でなかったら、「生ひば生ふるかに... せよ」の「...」部分の省略であるはずだと、終助詞「カニ」の一首での働きを問題にする。

第三の問題点は、「おもしろき」は、「馴染み深い、懐かしい」の意味で、野原への懐旧の情を表現する言葉であって、「見て楽しい、興味深い」ではないとする。野への懐旧の念が生じる理由を、折口氏は次のように論じる：野原と其処に生える草は、万葉の人々に容易に、そこで「共寝」した懐かしい記憶を呼び覚ます。「古草に新草まじり」の古草は、過ぐる年草陰に籠った因縁の草であるとし、大伴坂上郎女の旋頭歌「佐保川の 岸のつかさの 草な刈りそね ありつつも 春し来らば 立ち隠るがね」(④ 529)に言及して、野の草といえば、直ちに逢い語らう男女が目に見え、古草は草陰に籠った記憶を、新草はその伸び揃う春を心待ちにする村人の 倂を連想するのが共有の理解であったとする。共有というのは、野の草陰に籠る男女と、その草を焼き囲む野火の聯想は、倭建命の野火攻めの伝説と、未開地を墾く野焼きに際して土地の精霊を鎮緩する呪詞が融合した「気分」のことであって、それが民謡に、さらに文学にも浸透してくるからであるとする。折口氏はこの東歌のもつ独特の「気分」(=情調)を、「おもしろき」一語に込められている共寝の「黙会」(暗黙の了解)であったとし、「おもしろき... な焼きそ」に野での密会の実感を和らげた「調子」が読みとれるとし、第三句から四句への柔らかな移り方を指摘し、さらに第五句は穏やかな拍子に転換して結ばれていると評している。それらを踏まえての氏の現代語訳は、「わが立ち隠れるべき、おもしろの野を焼くな。野はふる草まじり新草生ひて、寝好げに見えるを」である。

折口氏指摘の第2、第3点については、後で取り上げることにして、第1点の「生ひば生

ふかに」の重複表現への私見を述べて置きたい。同様の「重ね語」(畳み句)的表現は集中随所に見い出される。「^{あかとき} 暁 と ^{かけ} 鶏は鳴くなり よしゑやし ^{ひとぬ} ひとり寝る夜は 明けば明けぬとも」(⑩ 2800 訳 もう夜が明けたと鶏が鳴く。貴方が来ないひとり寝の夜なんて、ままよ、明けたければ明けてしまえばよい)。「^{しろたえ} 白檮の ^{なぬ} 袖並めず寝る ^{こよひ} ぬばたまの 今夜ははやも 明けば明けなむ」(⑫ 2962 訳 恋しい人と共寝できずひとり寝る今夜なんか、早く明けてほしい)。更に、卷十五 3662 に施頭歌：「^{あま} 天の原 ^さ ぶり放け見れば ^ふ 夜そ更けにける よしゑやし ^{ひとぬ} ひとり寝る夜は 明けば明けぬとも」(訳 大空をふり仰ぐと、夜も更けた。ままよ、妻なしのひとり寝の夜は、明けたら明けたで、惜しくないわ)、がある。三首とも「ひとり寝」を恨むモチーフを、類似表現で匿名の作者が個性を出している。

重複表現は又、同一語を繰り返すことによって情調を高めうるので、長歌での修辞上の要請の一つであったと思われる。高市皇子尊の城上の殯宮時の人麿の一大長歌には、同一表現の繰り返しの対偶表現(対句)が随所に見出される。「重ね語」(畳句)もその一つである。「...^{まつろ} 服従はず ^{はぶ} 立ち向ひしも ^け 露霜の ^け 消なば消ぬべく ^{はし} 行く鳥の ^{こと} 争ふ間に...^{くだら} 言さへく ^{くら} 百済の原 ^{かむはぶり} 神 ^{はぶ} 葬り ^{はぶ} 葬り...」(② 199)。「消なば消ぬべく」をもう一例引く。「^あ 春されば ^{はな} 花咲きををり ^{あき} 秋づけば ^{にほ} 丹の穂にもみつ ^{うまさけ} 味酒を ^{かむなびやま} 神名火山の ^{あすか} 帯にせる ^あ 明日香の川の ^{すみ} 速き瀬に ^{たまも} 生ふる ^{なび} 玉藻の ^{きこる} うち靡き ^け 情は寄りて ^け 朝露の 消なば消ぬべく ^{こもりづま} 恋ふらくも ^{しるくも} しるくも逢へる ^{こもりづま} 隠妻かも」(⑬ 3266)。

肥後の^{ともびと} 従人^{くまごり} 大伴君熊凝が上京の途中、安芸の国高庭の^{うまや} 驛家で十八歳で客死した時、死者の心情を山上億良がなり代って詠んだ挽歌の序、長歌一首、短歌五首(887~891)では、故人への同情と故郷の父母の無念を強調するために、至る所に重ね語を含めた数種の対偶表現が交ぜ合わされている。

(序)「...我を待ちて目を過さば、おのづからに心を傷むる恨みあらむ。我を望みて時に違はば、必ず明を喪ふ泣(失明の嘆き)を致さむ。哀しきかも我が父、痛ましきかも我が母...

(⑤ 886)「...己が身し 勞しければ 玉杵の道の隈廻に 草手折り 柴取り敷きて 床じもの うち臥伏して 思ひつつ 嘆き臥せらく 国に在らば 父取り見まし 家に在らば 母取り見まし...

(⑤ 888)「常知らぬ 道の長手を くれくれと 如何にか 行かむ 糧米は無しに」

(⑤ 889)「家に在りて 母が取り見ば 慰むる 心はあらまし 死なば死ぬとも」

(⑤ 890)「出でて行きし 日を数へつつ 今日今日と 吾を待たすらむ 父母らはも」

(⑭ 3487)「梓弓 末に玉纏き かく為為そ 寝なな成りにし 将来を兼ね兼ね」

上代の語法からも、用法からも、「生ひば生ふるがに」は、必ずしも稀有な表現ではない。

四

もう一度、A~Fの六首に戻る。繰り返しになるが、六首の何れも、他者(景)への呼びかけと、「ナ... ソ」の禁止命令、そしてその禁止命令の目的・理由の説明の三つを含んで

いた。これは、詠み手（作者）が、自分の外にあって注意をひいた特定の景物に自分の心情を託す「寄物陳思」型の歌で、今、「ナ…ソ」と禁止を呼びかける部分までを「景」、残りの部分を「心」と呼ぶとする。すると、六首には、景と心の配列に二通りあることに気付く。一つは 心→景と並ぶもので、Aは、「降る雪はあはにな降りそ」（心）→「吉隱の猪養の岡の寒からまくに」（景）と、先ず心を述べ、景が続くものであるが、実はこの203番歌には問題があって、ここでの景は、単純な景でなくて、景には既に心が一部混入しているが、それについては直ぐ後で論じることになる。あと一つは、Bの如く、「大口の真神の原に降る雪は」（景）→「家もあらなくに」（心）と、景が先立ち、心がそれに従うものである。後者が、典型的な寄物陳思で、B、C、Eがこれに該当する。A、D、Fは、対蹠的に「心」から始まり「景」が続く。この二通りの並び方には、作者側に何らかの意図あったのであろうか、それとも、無作為、或いは恣意的に並んでいるだけであらうか。その間の事情を明らかにするために、試みにAの順列（心→景）を、A'（景→心）と変えてみる。

A（原型） 降る雪は あはにな降りそ 吉隱の 猪養の岡の 寒からまくに

A'（変型） 吉隱の 猪養の岡に 降る雪は あはにな降りそ 寒からまくに

こうすると何が起こるのか。A→A'では、歴然と改悪が起こる。原型の3・4句にあった「吉隱の猪養の岡」を、変型のように1・2句に持って来た途端に、元歌の緊張感、悲愴感が掻き消える。一首の情調は弛緩して、凡庸に変じ、おまけに意味まで不明確になる。と言うのは、A'では、「寒からまくに」の主体が曖昧になるからである。「誰が寒からまくに」とこの詠み手は言っているのか。変型する前のAでも、アンケートの答えの中に、「寒いだろうに」と同情されているのは、遠隔地の身内の人であったのに、況してA'では主体の同定は一層困難になる。この曖昧さは、次のB歌で、第5句の「家もあらなくに」と雪降りの野原で難渋して嘆いているのが、詠み手自身なのか、それとも旅の一行なのか、はたまた、特定の恋人なのか、はっきりしないのと似ているが、曖昧さはA'の方が甚だしい。原型Aではそういう紛れは一切ない。寒いのは「吉隱の猪養の岡」以外の何物でもない、そしてそれを決めるのは「猪養の岡の」での主語を示す格助詞「の」一字である。

Aは、「降る雪は、そんなに降らないでほしい」という詠み手穂積皇子の（心）→「吉隱の猪養の岡が寒いだろうから」（景+心）の順に、より正確には、（心 + 景・心）と並んでいる。一方、A'型に転換すると、「吉隱の猪養の岡に降る雪は」（景）+「そんなに降らないでほしい」（心）という順番になり、Bと全く同形の（景+心）、いわゆる「寄物陳思」型の景に触発され叙情する歌となる。「寄物陳思」と対比されるのは、景に頼らず心情のみを歌う「正述心緒」であった。今、Aの「吉隱の猪養の岡の・寒からまくに」の部分が、景・心の順に並んでいると言ったが、これには補足が必要である。「吉隱の猪養の岡」は、固有の土地名、ここでは、但馬皇女が埋葬された僻地の岡という外なる景を指示しているのと同時に、否それ以上に、この岡は人里離れた墓地にひっそりと横たわる薄幸の皇女の屍そのものである。そして、さっき言ったように、「吉隱の猪養の岡の」の最後の「の」は、次に

続く「寒いだろうから」の主体を明示している。「猪養の岡」は、但馬皇女の遺体であることによって、「寒からまくに」という穂積皇子の労りの心情と緊密に結合して、景・心の融和体を形成している。一首の構成が「心+景・心」の順に並ぶと言ったのは、この意味であるが、この考えをもう少し敷衍すれば、次の様にも言えるであろう。第1句「今、目の前で降っている雪」(景1) + 第2句「あはにな降りそ」(心1)、第3・4句「吉隠の猪養の岡の」(景2) + 第5句「寒からまくに」(心2)と細分し、前段の情調は「景1<心1」で心に統合され、後段は「景2=心2」、景・心が混然一体となった形、即ち一首の構造を「心+景=心」とするのは如何であろうか。こう考えてくると、203番歌が何故「降る雪は・あはにな降りそ」で始まらなければならなかったかが分かる気がする。題詞にあるように、穂積皇子は、ある雪の降る日、雪をみているうちに、その年の夏に死んだばかりで、邸からも見える吉隠の岡に埋葬されている昔の恋人但馬皇女を思い出した。皇女との出会いと、束の間の恋愛と、不幸な結末が、走馬灯の如く甦る。皇女の生前の佛と今まで封印してきた皇女への思いが、今吉隠の猪養の岡にひっそりと眠る皇女の死体とその上にしんと降り積もる雪の景と、緋い交ぜになって押し寄せてくる。歌もそれを表すように、「今降っている雪よ、どうかそんなに降らないでおくれ」、「あそこ(猪養の岡)に眠るあの人が、寒いだろうから」と雪に懇願する。雪に埋もれてゆくのは猪養の岡=皇女の幻である。猪養の岡の皇女の姿は、私に中国西域のロプ・ノール湖畔に栄えた楼蘭の古代遺跡から発掘されたミイラの映像を聯想させた。1980年、日中シルクロード取材班のカメラが、2,000年ぶりに砂の中から遺体を掘り出す様子を撮影した。丁寧に幾重にも巻かれた毛織物の下から、若い楼蘭女性の頭部が現れ、その薄褐色の髪には、新妻に贈るのが習慣だったという青鷺の羽が二本、独り残された夫の手で挿されていた。同じように、愛する但馬皇女への「あはにな降りそ」、「寒からまくに」という皇子の「悲傷流涕」の真情は、ごく最近まで定着していた終句の訓み、「塞なさまくに」からは決して出てこないものである。「塞となるだろうから」(「但馬皇女のお墓のある吉隠の猪養の岡に通う道を遮って邪魔になるから」斎藤茂吉訳『万葉秀歌』上巻 p104)と解けば、墓に行く道を塞ぐ大雪のイメージは浮かんでも、但馬皇女の屍の上に霏々と降りしきる雪の凄愴性は失われてしまう。

次に、Aに類似しているが、実質少なからぬ差異のあるBも、語順を変えると何が起こるかを検証してみたい。

B (原型) 大口の 真神の原に 降る雪は いたくな降りそ 家もあらなくに

B´ (変型) 降る雪は いたくな降りそ 大口の 真神の原に 家もあらなくに

元歌Bの景の部分を中心の部分と入れ替えてB´としても、両者の間には、特に目立った変化は起こらない。B´が、いささか格調が高くなるくらいで、最終句「家もあらなくに」の主語は、いずれの場合も曖昧である。B歌と同様に旅行先での難渋をモチーフに、「地名、降る雨、家もない」を詠み込んだ長忌寸奥麿の類歌がある。「苦しくも 降りくる雨か 三輪の崎のわたりに 家もあらまくに」(長忌寸奥麿 ③ 265)。ここでは、上二句で、雨に難渋している主体は、歌単独から判断すれば、詠み手の奥麿である。しかし、幾つかの状況証拠から、

これを紀伊国行幸じゅうが従駕作とするなら、難渋しているのは、天皇初め行幸の一行ということになる。Aの死せる皇女の屍にしんしんと降り積もる雪に触発された「寒からまくに」の痛覚は、主体不明の舎人娘子作Bではすでに希釈され、奥麿歌での「苦しくも降り来る雨か」では、痛みは実感に程遠い観念へと上滑りしている。これを本歌取りした藤原定家の「駒とめて 袖打ちはらふ かげもなし 佐野の渡りの 雪の夕暮れ」(『新古今和歌集』巻六 冬歌 671)では、雪の寒さそして旅での不安といった生々しい実感、もはや定家の美意識により完全に払拭されて、抽象的な最終句「雪の夕暮れ」に集約されている。

順列による変化をもう一組見てみよう。C歌とその変型、C´「呼子鳥 いたくな鳴きそ 神名火の 伊波瀬の社の わが恋まさる」である。しかし、このC´は3・4句と5句がどうしても繋がらず、一首として成立しないので、同じ趣向の坂上郎女歌C"を代用する。

C 神名火の 伊波瀬の社の 呼子鳥 いたくな鳴きそ わが恋まさる (鏡王女⑧ 1419)
 C" 霍公鳥 いたくな鳴きそ 独り居て 寝の寝らえぬに 聞けば苦しも (坂上郎女⑧1484)

(訳: ホトトギスそんなに鳴かないでおくれ。独りで、ただでさえ眠れないのに、お前の声を聞けば苦しくなるから) 作者の坂上郎女は、既述のように、穂積皇子が晩年に娶った才媛で、彼女の歌には様々な種類があり、いずれも水準を抜く出来栄をみせているのは衆人の認めるところであるが、時たま、一寸した技巧上の綻びを見せるものが見受けられる。この1484番の霍公鳥歌も、「いたくな鳴きそ」との懇願の理由は、第3、4句「独り居て 寝の寝らえぬに」で、すでに十分意を尽くしており、最終句「聞けば苦しも」は、有らずもがなの感を拭えない。「独り居て」、「寝の寝らえぬに」、「聞けば苦しも」と、心情が三つも重なることによって、一首の調子が諄く(過剰に)なった。特に4、5句の「寝の寝らえぬに」と「聞けば苦しも」は、下に引用するように、類似表現が無闇に多く、それが郎女歌の或るものに個性の埋没、独創性の欠如を見させる原因かも知れない。

- ・妹を思ひ 眠の寝らえぬに 暁の 朝霧隠り 雁がねそ鳴く (⑮ 3665)
- ・秋の夜を 長みにかあらむ 何そここば 眠の寝らえぬも 独り寝ればか (⑮ 3684)
- ・妹を思ひ 眠の寝らえぬに 秋の野に さ男鹿鳴きつ 妻思ひかねて (⑮ 3678)
- ・霍公鳥 無かる国にも 行きてしか その鳴く声を 聞けば苦しも (⑧ 1467)
- ・春の過ぐれば 霍公鳥 いや頻き鳴きぬ 独りのみ 聞けばさぶしも (⑩ 4177)
- ・われのみし 聞けばさぶしも 霍公鳥 丹生の山辺に い行き鳴かなも (⑩ 4178)

反ってCの鏡王女の「わが恋まさる」の大らかな無技巧の声調の方が好ましく、またこの歌と甲乙付け難い姉である額田王の「古に 恋ふるむ鳥は 霍公鳥 けだしや鳴きし 吾が念へるごと如」(② 112)の典雅な調べには、情緒過剰気味の坂上郎女歌は遠く及ばない。

Dの「沫雪は 今日な降りそ 白栲の 袖巻き乾さむ 人もあらなくに」は、そもそも景らしい景が存在しないので、語順の変換はありえない。

Eは「岡の崎 廻みたる道を 人な通ひそ ありつつも 君が来まさむ 避道にせむ」と、循環する旋頭歌形式であるので、これまた前段と後段の倒置は考えられない。

Fでは、3、4句を前に引き出して、「古草に 新草まじり おもしろき 野をばな焼きそ 生ひは

生ふるがに」とすることは不可能ではないが、それでは、折口氏が指摘したように、「おもしろき」は、古草と新草の交じり具合が「面白い^{おもしろ}」ことになって、歌の真意を逸脱することになる。

五

前章四で述べてきた順列と密接に関係する構成上のもう一つ要素は、「ナ… ソ」という禁止表現と、その理由説明の存在と働きである。A～Fでの、禁止表現と説明部分の一首での位置を確認すると、Aでは、第2句に「降る雪は あはにな降りそ」と禁止が来て、残りの3句分がその説明であった。Bは、「大口の 真神の原に 降る雪は いたくな降りそ」と禁止は第4句目に出てきて、説明は最終句「家もあらなくに」の1句だけである。同じく、Cでの禁止は「神名火の 伊波瀬の社の 呼子鳥 いたくな鳴きそ」と第4句にある。Eは、第3句「人な通いそ」、一方D、Fでは第2句に夫々禁止表現がくる。禁止表現の位置に^{こだわ}拘るのは、禁止が何処に来るかで一首の構造が決まり、構造が決まれば一首の心情表現もそれに規制されてくるからである。いや、実情は逆で、心情が先にあつて、次にそれを盛り込む枠組み(構造)が決まるのかも知れない。寄物陳思型のA～Fに於いて「ナ… ソ」は、景に触発された心情表現の最初の部分である。そして禁止した以上、その理由・目的・意図を補足説明する必要がある。この説明部分も勿論心情表現である。「ナ… ソ」(心) + 「説明部」(心) と心情が二重になっているが故に、心情表現がより細やかに表現できるということにもなる。さっき挙げた例を再び引く：坂上郎女歌、^{ホトトギス}「霍公鳥 いたくな鳴きそ 独り居て 寝の寝らえぬに 聞けば苦しも」では、景を^{ホトトギス}霍公鳥と普通名詞一語に簡略化したので、禁止部「ナ… ソ」が第2句に来ることができ、後に3句分の心情表現の^{ゆとり}余裕があった。郎女はそれを「独り居て 寝の寝らえぬに 聞けば苦しも」とした。一方、鏡王女歌では、「ナ… ソ」が第4句にあるので、2度目の心情表現の余地は一句分しか残っていない。鏡王女は窮屈なその最終句を、「わが恋まさる」とおさめた。但し、だからと言って、「ナ… ソ」の位置が、必然的に一首の情調に影響するわけでもない。Bの舎人娘の「大口の 真神の原に 降る雪は いたくな降りそ 家もあらなくに」を變形して、「降る雪は いたくな降りそ 大口の 真神の原に 家もあらなくに」と禁止部を繰り上げて、格段の変化がなかった例もある。だが、203番では「ナ… ソ」の位置は決定的で、この位置が一首の情調を決定的に支配していると言ってよかった。しかし、これは何故なのか。A～F間の微妙な“温度差”は、「ナ… ソ」という禁止表現自体に起因するのか、それとも「ナ… ソ」に伴う理由説明との相乗効果に^よ因るのか。

禁止表現の系列には、「ナ… ソ」という比較的穏やかな言い回しの他に、より強い禁止を表す「ナ… ユメ」、或いは単独の「ナ」がある。他方、もっと穏やかな懇願的修辭に「ナ… ソネ」がある。以下、それらの実例を主に万葉集から抜き出してみる。尚、それらの中に

は、既に引用済みのものが交じるが、確認・比較のため一々頁を捲り返す手間と不便を避けるための再掲である。全般的に言って、禁止表現には次の諸問題が関連してくる。即ち、誰が、誰に対して、どう言った場面で、何を禁止し、そしてその禁止の理由は何か、ということである。

先ず、歌の主体とその相手の特定の問題を取り上げる。その際、それら人物の性別も問題となる。一首中に「呼称」が出てくれば、解決は容易である。万葉集での呼称には、第一人称(ア・アレ・ワ・ワレ)と、第二人称(ナ・ナレ・ナンヂ・イマシ)がある。然し、相聞歌での極めて親密な恋人同士での第一、第二人称呼称には、男女での使い分けがない。男も女も、自分を「ア・ワ」と称し、相手を「ナ・ナレ」と呼ぶからである。次に第三者を意識した「妹」・「背」という一組の呼称があるが、これは男女の性別に従って呼び分ける。「妹」は、男性からの恋する女性・妻への愛称、「背」は、女性から男性への愛称であり、その逆はあり得ない。従って、「妹」と「背」は、一首の中の歌い手と、歌われた相手の性別を検出するための「リトマス試験紙」となる。相手への別の呼称「君」は、女子の男性への尊称で、男性は身分高い男性への敬称に「君」を使うことがあっても、およそ女性を「君」と呼ぶ例は万葉集にはない。第三人称の「子・兒」は、逆に男性専用で、卷一雄略天皇の「この岳に、菜摘ます兒」から、卷十四東歌での「多摩川に曝す手作りさらさらに何そ此の兒のここだ愛しき」(⑭ 3373)まで、随所に、歌い手の身分を問わず頻出する。最後に一般的に他人を指示する「人」があるが、修飾語を伴った「... 人」は、主として妹・背の代わりに相聞で使われる。「み空行く 月の光に ただ一目 あひ見し人の 夢にし見ゆる」(④ 710)。以上はみな、一首の中に登場する人物の身分、性別を判定するリトマス試験紙となる。以下、歌の中での呼称による歌い手、登場人物の同定・性別、更に一首の分類の可否をも、禁止表現と絡めながら見てみる。

1. 「ナ... ユメ」(かなり強い禁止であり、現代語の「決シテ... スルナ」に近い)

・人の見て 言答めせぬ 夢に吾 今夜至らむ 屋戸閉すなゆめ (⑫ 2912)

(訳 人が見答めしない夢の中で、今夜逢いに行きます。決して戸を閉めてはいけません。)

・思い出でて 哭には泣くとも いちしろく 人の知るべく 嘆かすなゆめ (⑪ 2604)

(訳 私を思い出して忍び泣きはしても、人が気付くほど烈しく嘆いてはいけません。)

・白椀の 衣の袖を 麻久良我よ 海女 漕ぎ来見ゆ 波立つなゆめ (⑭ 3449)

(訳 白椀の衣の袖をマクの、マクラカの海よ、漕いで来る海女の舟がみえる。波よ立つな。)

「人の見て」歌は、男が女の家に通った当時の習俗から判断して、男性の歌であろう。「思い出でて」歌は、詠み手の性別を判定する決め手がない。『古典文学大系』該当歌の(大意)「私を思い出して、忍び音に泣くとも、はっきりと人が知るほどに溜め息をついたりなさいますな、決して。」を読むと、注釈者は、これを女の歌と判断しているらしい。しかし、私(筆者)には、これは男の歌としか読めない。この万葉歌は古事記歌謡 83 番歌で、軽太子が軽太郎女を慰める場面を想起させる:「天飛む 輕の嬢子。甚泣かば 人知りぬべし、波佐の山の 鳩の 下鳴きに泣く」(訳 輕の乙女は、烈しく泣いたら人に知られると、波佐山の鳩のように忍び泣きに泣いているよ)。この歌

謡は、もともと歌垣歌で、初めて男を知った乙女が泣いている姿を、男が慰め？歌ったものを、古事記の編集者が、軽太子・軽太郎女の悲恋物語に転用したものであった。最後の「白柁の」歌は、袖をマクラガと地名に相愛を匂わせ、海女を見たいと言っているからには、男が歌ったと考えてよいであろう。

2. 「ナ…」(強弱どちらにも使える禁止表現、「ナ」と一字で済むので、句形を整える時に便利。)

- ・わが背子は 物な思ほし 事しあらば 火にも水にも われ無けなくに (④ 506)

(訳 わが背子よ、心配なさいますな。もし事が起こっても、火の中、水の中、この私がおりますから。)

- ・他辞を 繁み言痛み 逢はざりき 心あるごと な思ひ我が背子 (④ 538)

(訳 人の噂が多すぎるので逢わなかったのです。心変わりしたと思わないで下さいね、あなた。)

- ・遠き妹の 振仰け見つつ 思ふらむ この月の面に 雲なたなびき (⑩ 2460)

(訳 遠くに居る妹が仰いで私を思っているだろう、この月に雲よかかるな。)

- ・愛しと 思へりけらし 莫忘れと 結びし紐の 解くらく思へば (⑩ 2558)

(訳 妻が、忘れないでと、結んでくれた下紐が解けるのをみると、今頃私を恋しく思っているらしい。)

- ・青土よし 奈良の峡谷に 獣じもの 水漬く辺隠り 水そそく 鮪の若子を 漁り出な猪の子 (日本書紀歌謡 95 番「影媛悲歌」)

第一、第二首に「わが背子」、第三首には「遠き妹」とあるので読み手の男女別に紛れはない。第一首では、気の勝った女性が逡巡する男性を励まし、第二首では、逢い引きをすっぽ抜かした娘は、ちゃっかりその言い訳に他人の噂を持ち出して弁明している。第四首は、旅に出た夫が、下紐が緩んだのを機に、出がけに紐を結んで祈った妻を偲んでいる。「他辞を」と「遠き妹の」の二首は、順当なら前段に来る禁止の「ナ」が最終句に来たので、読み終わると前にはね戻る回帰運動をおこして、一種の切迫感を読む人に与える。日本書紀歌謡 95 番には、題詞が付いている：「ここに影媛、収め埋むること既に畢へて、家に還らむとするに臨み、悲鯁びて… 滯涕ち愴み、心に纏れて歌ひて曰く」。不吉な出来事を叙述する題詞に先立たれ、この紀歌謡は、陰気な溪谷の景に始まり、惨殺された恋人の埋葬死体を漁り出さないでと、猪に切々と訴える影媛の哀歌である。

3. 「ナ… ソ」(一番普遍的禁止表現。語調は軟らかく穏やかで、女性が好み、時には懇願に近い。)

- ・鯨魚取り 淡海の海を 沖放けて 漕ぎ来る船 辺附きて 漕ぎ来る船 沖つないたくな撥ねそ 辺つないたくな撥ねそ 若草の 去の 思ふ鳥立つ (② 153)

(訳 近江の湖の沖遠くから漕いでくる船よ、岸近く漕いでくる船よ、櫂でひどく水を撥ねないでくれ。夫が生前愛していた鳥が驚いて飛び立つから。)

- ・檀越や 然もな言ひそ 里長が 課役徴らば 汝も泣かむ (⑩ 3847)

(訳 檀家さんよ、そんな偉そうな口をききなさんな。貴方だって里長が課役を課したら、泣くでしょうに。)

- ・小墾田の 板田の橋の 壊れなば 桁より行かむ な恋ひそ吾妹 (⑩ 2644)

(訳 小墾田の板田の橋が壊れても、私は桁を伝って行く。だから心配しないで。)

- ・伊香保ろの 岨の榛原 ねもころに 将来をな兼ねそ 現在し善かば (⑭ 3410)

(訳 あれこれと取り越し苦労しなさんな。今さえ上手くいっているなら、それで良いじゃありませんか。)

- ・降る雪は あはにな降りそ 吉隠の猪養の岡の 寒からまくに (② 203)
- ・大口の 真神の原に 降る雪は いたくな降りそ 家もあらなくに (⑧ 1636)
- ・神名火の 伊波瀬の社の 呼子鳥 いたくな鳴きそ わが恋まさる (⑧ 1419)
- ・沫雪は 今日にな降りそ 白柁の 袖巻き乾さむ 人もあらなくに (⑩ 2321)
- ・岡の崎 廻みたる道を 人な通ひそ ありつつも 君が来まさむ 避道にせむ (2368)
- ・おもしろき 野をばな焼きそ 古草に 新草まじり 生ひは生ふるがに (⑭ 3452)

「鯨魚取り」の13句からなる長歌は、題詞によれば、天智天皇の大殯（遺体を棺に納めて置く‘もがり’）での皇后倭姫王の歌となっている。漕ぎ来る船の「櫂」に心を寄せての深い追悼と沈痛な口調は、穂積皇子の「雪」に悲しみを託した203番「降る雪はあはにな降りそ」のそれに似ている。ただ、最後の3句、「若草のツマの思ふ鳥立つ」のツマは、万葉では夫、妻の何れでもありうるので、ここでの決め手は題詞である。

「檀越や」歌は、卷十六の一連の「戯笑歌」に属する僧侶と壇家との悪口の遣り取り歌で、「法師らが 髭の剃杭 馬繋ぎ いたくな引きそ 僧は泣かむ」(⑯ 3846 訳 お前さんたちの剃り残した杭のような不精髭に、馬を繋いで引っ張ったりしたら可哀想だ。きっと痛がって泣くだろうよ。)と、擲揄された僧侶が、「そういう檀那だって、里の長が課役(労働と物品)を苛斂誅求したら泣きっ面になるだろう」と言い返したものである。「伊香保ろの」は、歌い手は男女何れとも決め難いが、東歌らしく楽天的である。再引用のA～Fでは、「岡の崎」歌が、「君が来まさむ」で女歌と分かるのみで、残り5首は、男女の別は歌だけでは分からない。題詞の必要な所以でもある。現にF「おもしろき」歌は、万葉歌としては、どちらかと言うと、男の歌らしく思える。しかし、これを元歌とした『古今集』春上17番歌「春日野は今日にな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり」での「つま」は、微妙である。『古今集』(小学館 s55年)の頭注で小沢正夫氏は云う：「つま」は「連れあい」で、『伊勢物語』12段では女が詠んだことになっているが、(古今集の)この歌だけでは男の歌に見える。

4. 「ナ... ソネ」(「ナ... ソ」より更に優しい表現、「お願イダカラ... シナイデ下サイ」)

- ・住吉の 出見の浜の 柴な刈りそね 未通女等が 赤裳の裾の 濡れてゆく見む (⑦ 1274) (訳 住吉の出見の浜の柴を刈らないで。乙女たちの赤裳の裾が濡れるのを見たいのだから。)
 - ・この岡に 草刈る小子 然な刈りそね ありつつも 君が来まさば 御馬草にせむ (⑦ 1291) (訳 この岡で草刈りする子供よ、そんなに刈るな。その儘にしておけば、あの方がお出でになった時の馬の飼い葉にするから。)
 - ・君に似る 草と見しより わが標めし 野山の浅茅 人な刈りそね (⑦ 1347) (訳 貴方に似ている草だと思って私が標刺した野山の浅茅ですから、他の人は刈ってはいけません。)
 - ・入間道の 大家が原の いはる蔓 ひかばぬるぬる 吾にな絶えそね (⑭ 3378) (訳 入間道の大家が原のイハキツラが、引いたら直ぐ抜けるようには、私との仲を絶えないでくださいね。)
 - ・安太多良の 嶺に臥す鹿猪の ありつつも 吾は到らむ 寝処な去りそね (⑭ 3428) (訳 安太多良の山の鹿猪が同じ場所で寝るように、私は何時もの処に行く。だから場所を変えないでおくれ。)
- 五首での禁止行為と、その目的・理由は夫々次のようである：「住吉の」：芝刈り、乙女の

姿。「この岡に」：草刈、君の来訪。「君に似る」：草刈、君の独占。「入間道の」：蔓の断絶、恋の破綻。「安太多良の」：居所変更、迷わぬため。

5. 「ナ… ユメ」・「ナ… ソネ」複合型

- ・ おおとの大殿の もとほりこの廻の 雪な踏みそね しばしばも 降らざる雪そ 山の上に 降りし雪そ ゆめ寄るな人や な踏みそね雪は (19 4227)

(訳 大殿のこの付近の雪を踏まないで下さい。山には降っても、ここでは滅多に降らない雪だから。近づかないで、踏まないで、この雪は。)

- ・ ありつつも 見し給はむそ 大殿の こ此の もとほり廻の 雪な踏みそね (19 4228)

(訳 このままで、殿もご覧になるだろう。御殿のこのあたりの雪を踏まないで欲しい。)

『古典文学大系』が言うように、長歌 4227 は、はじめ 3 句が、5 7 7 の片歌形式、次の 6 句が、5 7 5 7 7 7 の仏足石歌体になっている。そしてこの長歌と反歌には、左注がある：

「右の二首の歌は、みかたのさみ三形沙彌、ことば贈左大臣藤原北卿の う語を よ承け、依りて誦めり。聞きて伝ふるひとは、よ笠朝臣子君なり。
また復後に伝へ読むひとは、じょう越中国の こ掾 こ久米朝臣広縄是れなり。」左注により、この歌の詠まれた状況、それが伝わった経過が分かる。状況をもう少し補足すると、或る雪の朝、左大臣藤原房前が、久しぶりで降った雪を賞で、め三形沙彌なる者みかたのさみに雪景色を歌に詠ませた(代作させた)。求めに応じて紗彌は歌を作り、大臣たちに誦詠、即ち歌ったのであった。その時の歌を憶えていたのが久米広縄で、歌は彼から大伴家持に伝えられ文字に記録された。歌が祝祭ムードに充ちているのも、全体の調子が弾むようにリズムカルであるのも、歌が祝い歌であり、恐らく祝宴の席で歌われたせいであろう。節をつけて誦詠された痕跡を残すこの仏足石歌のリズム感、小刻みな句の進行と、仏足石体の特徴である最終二句の対句的繰り返しから起こる：「さか釈迦の御足跡 みあと石に写し置き うやま敬ひて あと後の仏に 譲りまつらむ 捧げまうさむ」(仏足石歌 ⑨ 訳：釈迦の足跡を石に彫り置いて、後の仏である弥勒菩薩にお譲りしよう、捧げよう)。4227 歌では、片歌 5 7 7 「大殿の・この廻の・雪な踏みそね」の 3 句目の「雪な踏みそね」は、続く仏足石歌 5 7 5 7 7 7 の最後の 7 7 (この歌では 8 8) で二度繰り返されて、「ゆめ寄るな人や・な踏みそね雪は」となる。最後三句が、7 7 7 でなくて 6 8 8 と不揃いなのは、反ってこの歌が宴席の多人数の客に向かって歌われたことの証拠とも言えよう。特に、片歌の下線部の最後句「雪な踏みそね」は、この歌のテーマでもあるので、仏足石体の最後で「な踏みそね雪は」と微妙に、しかし効果的に変奏されて、歌われたのであろう。『琴歌譜』には、語尾を上げて歌う「尻上げ振り」が記録されている。ただし、「大殿の」歌での三方紗彌の浮き浮きした口調は、アララギ歌人には不人気であった。藤森朋夫氏は、「一首が幾つにも分かれていて、それが躍動感を生んでいるが、… 喜びの情に乗じて稚気を弄んでいる感がある(『前掲書』p424)」との評価を下している。

「ナ… ソ」で代表される禁止表現と、それが必然的に必要とする禁止の理由説明(そしてこの説明部は最終句に位置することが殆どであったが)とで、一首の情緒が決定されるかと言うと、必ずしもそうではない。禁止表現のない歌においても、次のように一首のトーンを明確に示す句が、早くも冒頭に来れば問題はない。「苦しくも 暮れぬる日かも 吉野

川 清き川原を 見れば飽かなくに (⑨ 1721)。「いで如何に ここだく恋ふる 吾妹子が 逢はじと言へる こともあらずに (⑩ 2889)」。前者は羈旅歌、後者は恋歌である。冒頭でなくても、幸い途中で、歌の種類を特定する「標識」にぶつかることもある。「楽波の 志賀津の子ら が 罷道の 川瀬の道を 見ればさぶしも」(② 218) (訳 志賀の乙女の葬送の川瀬の道は、見れば淋しい) は挽歌。次の歌も、途中で挽歌らしくなる。「草枕 旅の宿に 誰が夫か 国忘れたる 家待たまくに」(③ 426 訳 旅先で行き倒れた生国不明の男がいる。あれは誰の夫だろうか、家人はさぞ待っているだろうに)。ただしここでの決め手は最終句である。最終句まで来ても、判然としない場合もある。「秋山に 落つる黄葉 しましくは な散り乱ひそ 妹があたり見む」(② 137 訳：秋山の黄葉よ、しばらくは散らないでくれ。妻の家のあたりをみたいから。) は、相聞であるが、「秋山の 黄葉を茂み 迷いぬる妹を求めむ 山路知らずも」(② 208 訳：秋山の黄葉があまりにも茂っているので、迷い込んだ妻を探し求める山路が分からない。) は、人麿の軽の妻への挽歌である。次も、最後まで判断に迷うものである。「天敷ふ 大津の子が 逢ひし日に おぼに見しかば 今ぞ悔しき」(② 219) と、「葛城の高間の草野早領て 標刺さましを 今ぞ悔しき」(⑦1337)。題詞によれば、前者は吉備の津の采女への人麿の挽歌、巻七の後者には題詞はないが、分類上は「草に寄す」と「譬喩歌」の項に掲げられているが(譬喩歌は正述真緒、寄物陳思と並んで万葉集の表現手段による区分で、別の巻では雑歌に分類する寓喩である)、実質は相聞歌である。大抵題詞が決定権を持っていることは否めない。とは言え、しばしば編者の思惑も裁ち入れられた題詞から、当該する歌の真意を常に確定できるわけもないことは再確認しておく必要がある。

更にこの問題を複雑にするものに、最終句での結びの言葉「… マクニ」、「… ナクニ」、「… ガニ」がある。上代語の文法に疎い筆者は、これらの語源、機能などの情報を全て、『日本古典文学大系』の注釈、補注に頼った。従って以下の要点は、そうした注の引き写しである。A～Fは、禁止命令に対応する禁止の理由説明を最終句に持っていた。即ち、A「寒からまくに」、B「家もあらずに」、C「わが恋まさる」、D「人もあらずに」、E「避道にせむ」、F「生ひは生ふるがに」である。Cは、呼子鳥に烈しく鳴かないでくれ、「恋心が募るから」と理由を、Eでは、人に通ってはいけない、「あの人専用の道にしたいから」とこれまた理由を述べている。BとDは、ともに「アラナクニ」で終結している。この「アラナクニ」は、『大系』によると、「ズ」の未然形「ナ」に、「事」を意味する助詞「ク」がついたもの、『大系』が“ク語法”と呼ぶ用法であり、「ニ」は感動の助詞で、「ナクニ」で切れたあとも余情が残るとする。Aの「寒からまくに」の「マクニ」は、同じく「ム」の“ク語法”。「マクニ」の使用例で筆者が探し出したのは三例のみである。一つは、柿本人麻呂、香具山の屍を見て詠えると題詞のある挽歌、「草枕 旅の宿に 誰が夫か 国忘れたる 家待たまくに」(③ 426 訳 旅先で死んで生国も分からないこの男は、誰の夫だろうか。家人はきっと帰りをまっているだろうに)。もう一つは大伴家持の相聞、「なかなか 黙もあらましを 何すとか 相見そめけむ 遂げざらまくに」(④ 612 訳 かえって黙っておればよかったのに、どうして逢うようになったのだろう。添い遂げることはできないだろうに。) 三首目は『譬喩歌』(寄物陳思)、「絶えずゆく 明日香川の 淀めらば 故しもあるごと 人の見まくに」(⑦1379)。三首とも「マクニ」で詠い手の心情は切れ

なくて、前段にはね戻っている。

Fの「生ひは生ふるガニ」の「ガニ」に関しても、『大系』が、補注で15首程の具体例を引用して、詳しく解説している：「ガネ」は「予て」と同語源で、予料、候補者を意味した。元来名詞だから、歌の末尾では体言止めの働きをする。前段で命令・意志を表別し、後段でその理由・目的を明らかにする構成になる。「梅の花 われは散らさじ あをによし 平城なる人の 来つつ見るがね」(⑩ 1906 訳 「梅の花を私は散らすまい。奈良にいる人人が来て見るためのものであるから」と、「理由」に訳しているが、「目的」=「見る料(ガネ)」とも読めて、その差は微妙であると説く。先に引いた折口信夫氏が終助詞「カニ」で迷ったのも正にこの点であった。さらにこの注者は、万葉集での「... ガネ」の唯一の例外、3452番の「おもしろき 野をばな焼きそ... 生ひば生ふるガニ」の「ガニ」は、「ガネ」の(東歌の)方言的变化形であろうと付け加えている。但し中古になると用例は「ガニ」のみとなるともいう。確かに、『古今和歌集』卷十六 哀傷歌に、妹の身まかりける時よみけるをのたかむらあそん 小野 篁朝臣と題詞のある一首には、「ガニ」とある。「泣く涙 雨と降らなむ 渡り川 水まさり ならば 帰り来るがに」(⑩ 829 訳 私の泣く涙が雨となって降ったらよい。そうしたら三途川が洪水になって、彼女がこの世に引き返してくるだろうから。)

挽歌の発生源を寿歌に見出しうると論じるのは古橋寛氏である。『古代歌謡全注釈・古事記編』(角川書店 平成7年版)の解説で氏は説く：「前句A(景)・後句B(人事)が対照的ものを、対照形式と呼び、これにはAは良いがBは悪いという関係のものと、Aも良いがBはいつそう良いという関係になるものがあって、前者は挽歌に、後者は讃歌に多い」として日本書紀の第114番歌謡「本毎もとごとに 花は咲けども^A 何とかも 愛し妹が また咲き出来ぬ^B」、及び仏足石歌第15番「薬師は 常とこのもあれど^A 賓客の 今の薬師 貴たふとかりけり 賞めだしかりけり^B」(訳 日本古来の呪術神も優れているが、外来の仏陀も貴い医師だ)を例に引いて、「挽歌は、歴史的にはAの繁栄に寄せて、類比的・融即的にBの繁栄を寿ぐ寿歌・寿詞の否定として成立した…… 言い換えると挽歌は、それ自身の発想法を持たず、Aの繁栄にもかかわらずBは衰亡するという、寿歌的発想によって人の死を歌っているのである」と結論している(『上掲書』p. 398)。なかなか示唆に富む説ではあるが、これ一つで雑歌・相聞・挽歌の成立を網羅的に説明できるとは思われない。氏の引く紀114番歌謡は、大化5年3月、中大兄皇子の妃造媛みやっこひめの死を追悼して、帰化人野中川原史満のなかかはらのふみまろが代作して皇太子に献じたもので、日本最初の挽歌とされるものである。しかし、既に中国詩に同じモチーフが存在することも知られている。そもそも、恋愛と並んで人間感情の最たるものである死者への哀悼の念が、それと正反対の自然を誉めたたえる寿歌(国褒め)の発想形式によってのみ(排他的に)表現されるようになったとは、容易に信じ難いことである。

反って、古事記34~37番歌謡での倭建命喪歌は挽歌の初出と言っても良いものであるが、古橋説ではこの民謡風の不定形の短詩から挽歌が生成する契機や成立過程は読み解けない。「なづきの 田の稲幹に、稲幹に 蔓ひ廻ろふ 藜葛」(記34)、「浅小竹原 腰泥む。 空は行かず 足よ行くな」(記35)等のどこにもA(景)・B(人事)の対照も、比例関係もない。倭建命関係歌なら、「さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて 問ひし君はも」(記24) (訳

相模の野原に燃える火の中に立って、私に呼びかけた貴方よ) でのかつてともに籠った春の野の回想的トーンをもつ別歌のほうが、詠嘆の「はも」があるだけに、失われたものへの哀感を読みとることができるのではないか。しかし、ここでの相関は、相聞⇔挽歌である。日本書紀歌に於いても、年代的には紀 114 歌「本毎に」に先行し、葬送をテーマにする影媛歌紀 94「石の上 布留を過ぎて 薦枕 高橋過ぎ…」、紀 95「青土よし 奈良の峡谷に 獣じもの…」には、道行きや哀悼のモチーフはあっても、古橋式景と人事(心)との反比例的モチーフは見いだせない。このことは、紀 98 番の毛野臣の葬礼の歌でも同様である。近江臣毛野は、征新羅遠征軍の総司令官だったが、任那奪還に失敗、本国に召喚される途中、対馬で病死する。日本書紀第 98 歌には長い題詞がある。最後の一行と歌謡を次に引く：是の歳、毛野臣召されて対馬に到り、疾に逢ひて死りき。送葬りて、河のまにまに近江に入りき。其の妻歌ひしく、「枚方ゆ 笛吹き上る。近江のや 毛野の若子い 笛吹き上る。」(紀 98 訳 枚方から喪船が笛を吹きながら上ってくる。近江の毛野の若様が笛を吹いて上ってくる)。笛を奏しながら遡上してくるのは毛野の遺体を載せた喪船であるが、妻には、毛野自身が悲しい笛を吹きながら近づいてくるのである。同じ日本書紀歌謡 116～121 番の 6 首は、斉明天皇が夭折した孫の建王を偲んだ挽歌とされているものであるが、どこにも古橋氏の云う寿歌での挽歌の始原はない。一首のみ挙げる。「射ゆ獣を 認ぐ川辺の 若草の 若くありきと 吾が思はなくに」(紀 117) (訳 射られた鹿の血の跡を追う川辺の若草のように、貴方が若かったとは私は思わない。) これは難解歌で、どうも代作者が、万葉集の類似相聞歌、「所射鹿を 認ぐ川辺の 和草の 身の若かへに さ寝し兒らはも」(⑩ 3874 訳 私が若かったころ、射られた鹿を追って行くあの川辺の柔らかい草の上で、一緒に寝たあの子は、今如何しているかなあ。) での老人の述懐の歌を参考にしたらしく、寿歌→挽歌という古橋式一次方程式では解析不可能である。万葉集の三大部立の始原と相関に関しては、もう少し複雑な方程式が必要なのではないか。

跋

万葉集に記載されている穂積皇子の歌は、計四首であるが、一で述べたように私は巻八の 1513 と 1514 の二首は皇子の作ではないと考え、専ら 203 番を論ってきた。ここで残ったもう一首、巻十六の 3816 歌、「家にありし 櫃に鑲刺し 藏めてし 恋の奴の つかみかかりて」を取り上げる。左注によれば、この歌は穂積皇子が宴会の席で酒酣となった時、いつも「誦した」とする。この歌は題詞に穂積親王作となっているので、穂積皇子とは別人の歌ではないかと疑う向きがあるが、大宝元年の大宝律令発布以後は、天皇の兄弟、皇子は、公式には親王と呼ばれたので、穂積皇子と穂積親王とは同一人である。こういう人達にはまた、3816 歌の戯歌めいた浮かれた調子が、203 歌の沈痛な響きと折り合わないらしい。しかし、私は、酒の席で穂積皇子が十八番にしていたとするこの剽軽な歌は、やはり皇子の作であると考えたがよいと思う。

持統天皇の強力な指導力の下、着々と統治態勢を整えていた当時の律令社会で、穂積皇

子は、終始政界のトップの一人として政治の中枢にいた。着実に任務を遂行し、皇親政治を能率的に機能させるように腐心した。これは、穂積皇子にとっては気疲れのするものであって、ときたまの身内だけでの宴会などは何よりの息抜きの場であったに違いない。想像を逞しくすれば、穂積が寵愛して止まなかったまだ十代半ばの幼な妻坂上郎女も、きっと宴席に同座していたろう。宴たけなわで、程良く酒の廻った身内の誰かが、皇子の幼妻への溺愛をからかう、そういう時の穂積皇子の照れ隠しが、この「恋の奴」歌だった。しかし、自らを半ば茶化して、半ば韜晦して歌うこの初老の政治家にして有力な皇嗣の胸に、一瞬亡き但馬皇女への追憶が過らなかつたとは誰にも断言できないであろう。「恋の奴」歌は、穂積皇子の器量の大きさを示すと同時に、繊細な皇子の心の襞をも描き出していると思われるべきではないか。

恋多き素質は遺伝するものであろうか、皇子の孫娘にあたる^{ひろかわのおほきみ}広川女王に二首恋の歌がある。「恋草を^{ちからくるま}力車に^{ななくるま}七車^わ積みて恋ふらく 吾が心から」(④ 694 訳 恋草を七車分も積むくらい、私は恋しています、心から。) 「恋は今^{われ}あらじと吾は^{いつこ}思へるを^{つか}何処の恋そ 掴みかかれる」(④ 695 訳 もう私は恋なんて卒業したと思っていたのに、また、いつの間にか恋が私に掴みかかったらいいわ。)

最後に、昭和 47 年(1972)に、奈良県高市郡明日香村大字平田字高松 444 で発掘され話題になった高松塚古墳がある。それまで文武天皇陵に比定されていたこの円墳は、色鮮やかな壁画、豊富な副葬品、金箔張り木棺など内装の豪華さが、国中の注目を集めた。以来、古墳本体の考古学的研究とともに、埋葬者の見直しも行われていて、今のところ天智か天武の皇子の墓であると推定されている。被葬者には、忍壁皇子、高市皇子、弓削皇子の名が上がっていて、穂積皇子も候補者の一人である。

(終り)

2013 年 5 月 29 日